ハーマン・メルヴィルの問題小説『信用詐欺師』を読む

── その主題をめぐって ──（上）

鈴　木　義　久

1846 年，南太平洋諸島を舞台とした海洋冒険談風の自伝的長編小説『タイピー』でアメリカ合衆国の文壇に登場し，注目を集めた小説家ハーマン・メルヴィル（1819-91）は新しい作風のものを含め，1856 年までに年に 1 作のペースで 9 作の長編小説を書き続けている。その第 9 作目が，この小論で扱う長編小説『信用詐欺師 ── その仮面舞踏会』（*The Confidence-Man: His Masquerade,* 1856）である。新しい作風の長編小説とは，第 3 作目の『マーディ』（1849），第 6 作『白鯨』（1851），さらに第 7 作目の『ピエール』（1852），そしてこの『信用詐欺師』を指す。

この作品の理解のために，それ以前の作品を，特にメルヴィルが新しい作風をと意欲的に挑んだ 3 作を，簡単にまとめてみたい。

まず第 3 作目『マーディ』は，一見すると処女作同様海洋冒険談風の小説だが，その実，前 2 作と異なる自伝的な要素が排除された虚構作品である。一口で言えば，複数の中心的登場人物がそれぞれの想いを抱いてともに絶対的真理を求めながら，執筆時の西欧諸国と自国アメリカに模された南海の架空のマーディ諸島の世界を遍歴する寓意的探求小説である。

この『マーディ』でも，前 2 作『タイピー』（1846）と『オムー』（1847）同様，物語を語る第一人称の語り手が冒頭から大海原で繰り広げられる活劇の中心的登場人物なのだが，奇異なことに，物語の舞台となるマーディ諸島に接近する途上で若く美しい女性の乗った小舟に遭遇し，同伴の老人を殺害して彼女を奪い，諸島の最寄りの島に上陸してともに暮らし始めた矢先に彼女が突然失踪し，その探索のために諸島遍歴に旅立つあたりから，主人公役の勤めを実質的に放棄する。主人公が幸いにも理想的な政体，信仰の姿を求めて諸島を歴訪する王，哲学者，詩人，歴史家のマーディ人一行と出会い，彼女を求めながら一緒に島巡りをし始めるあたりから，もっぱら一同行者として，彼らの見聞や形而上学的対話を語る語り部の役に転じ，一行の対話にはほとんど参加せず，冒頭からの主人公としての存在感ばかりか，さらには一同行者としての存在感すらも希薄となってゆくのである。途中，たまに捜し求める女性の行方の話が出てくるときだけ，主人公だったことが思い起こされるような具合なのだ。そして，物語の末尾近くで一時，再びその言動が物語の中心となって主人公に返り咲くや，真の信仰を見出した者も含めて諸島に留まる一行と別れ，単身絶海へ船出して真理探究の途に就くところで物語が終わり，その短期間の主人公役を終えている。

作者メルヴィルの創作意図は，他の同行者の諸島遍歴の目的を観念的な〈真善美〉のうち〈真善〉の追求とさせ，主人公の目的の方を生身の若い美女を残る〈美〉の象徴的存在としてこれを追わせ，主要な登場人物のマーディ諸島遍歴の目的

が〈真善美〉の探求にあることを，読者に読み取ってもらうことにあったのだろう。しかし，作品から主人公が，その女性が観念的な〈美〉の化身だと認識していると認められる箇所は見出せない。さらに，同行者でありながら一行の形而学上的な話題を始めとする様々な話題の飛び交う談話に参加させていないことも結果的に，読者に，主人公は単に生身の若い失踪した美女を追うだけの，知性を感じさせない一介の船乗りにすぎないと疑わせ，他の一行の観念的真理探究者らとは縁遠い，と判断させる主因となっている。

作者の期待とは裏腹に読書界の反応は否定的で，メルヴィルは再び，商船，軍艦の乗組員としての体験を基に執筆した，海洋冒険談風の自伝的小説を第4作目，5作目 ──『レッドバーン』(1849)，『ホワイト・ジャケット』(1850) ── として世に送り出すと，これが処女作，第2作同様に好評を得る。

ところが，成功を収めたこれらの自伝的な小説に納得できる文学的な価値を見出せないメルヴィルは，捕鯨に従事した実体験を下地にした次の第6作『白鯨』(1851) で，第3作『マーディ』での失敗で学んだことを糧にして，自然界の一創造物である白い抹香鯨に人生の究極的な真理が秘められていると思い込む狂気の捕鯨船船長エイハブを主人公に据え，この鯨をどこまでも捜し求めて仕留させようとするが，鯨に逆襲され大海原で落命する悲劇を描く。この作品にも，『マーディ』同様，本筋から逸脱する記述が散在するが，より欠点の少ない，はるかに哲学的に深みのある真理探究小説に仕上がっている。売れ行きはこれも『マーディ』同様に期待外れだったが，英米の批評家から一定の評価を受ける。今日も卓越した世界文学作品として高く評価されており，メルヴィルの代表作となっている。

そして，第7作目の長編小説『ピエール』(1852) は，物語の舞台を海上から陸地へと移し，アメリカの大土地所有の旧家の崩壊を扱った，メルヴィルにとって初めて試みる，やはり多少自伝的な要素を含んだ家庭小説的な意欲作だった。だが，田園地方の大土地を所有する生家から移り住んだ大都会の片隅のアパートの小部屋という狭い空間で，人間関係も束縛的な生活環境の舞台で，基本的に机に釘付けの創作が活動の中心となる文学青年という設定の主人公には，前作『白鯨』の主人公のような活動の場は無く，その言動に哲学的な深みをうまく付与できていない作品である。主人公の行く末とともに物語の中で読者の興味の的となる，共に暮らす異母姉と称する若い女性のその真偽は最後まで明かされることなく，四面楚歌の状況に追い込まれ，心身とも衰えて虚無感の深まる主人公は追い詰められてゆく。そして，異なる選択をしていれば自分がその身であったはずの，母の遺産を独り占めした挙げ句，自分を侮辱してやまないいとこに憤怒の弾丸を放ち，つながれた牢獄で，面会にきた真偽の定かでない異母姉と共に毒を呷って落命するのは悲劇である。さらに，何も告げられずに突然都会に去られたにもかかわらず主人公を信じて，正体不明の女性と暮らす彼の許に身を寄せ行動を共にしてきたかつての婚約者が，初めて主人公とその女性の死を，また二人の真の関係を知って衝撃死するのも悲劇であるが，『白鯨』で感じられるような大きなカタルシスはない。物語の後半は常に息苦しい閉塞感を与え，徒労感・不毛感が強く残る作品である。結果的に第3作の『マーディ』以上の酷評を受け，メルヴィルは，処女作のような海洋冒険小説に立ち戻れとする，一番受けたくない助言すらなされてしまう。

作家として身を立て続けようとするメルヴィルは，こうした現実を深刻に受け止めざるを得ず，

書きたいと思う長編小説の執筆を控え，以降は当時を代表する二つの月刊総合雑誌に長編小説 1 作，それに中編小説 1 作と短編小説 13 作を寄稿し，さらに，その中から一部作品を選んで編んだ中・短編小説集『ピアザ物語』用に書いた巻頭短編小説「ピアザ」を発表する。この雑誌寄稿期間中（1853〜56）にメルヴィルが執筆した作品数は，生前の未発表短編小説「二つの聖堂」を併せると，17 作に達する。これらの作品の作風を一口で言えば，海洋冒険談的な作品も二，三あるが ── そのうちの第 8 作目となる長編小説『イズラエル・ポッター』（1854.7〜1855.3 連載）は，独立戦争に参加した題名にある実在の兵士が残した伝記を基に描いた海洋冒険的歴史小説 ──，多くの書評家らから受けた当初の海洋冒険的な作風に戻れという助言に左右されることなく，大方は話題に身近な世相を選んで素描した，処女作から一貫して変わることのない社会的批判が，陰に陽に込められた小説となっている。

本稿で論ずる『信用詐欺師』は，これら 17 作の作品のあと出版された，作者最後の第 9 作目となる長編小説である。メルヴィルはこのあと小説の筆を折り，ニューヨーク港の一税関吏となって日給で長年（1866-85）働き続ける。その間もそれ以降も，余暇に時間を割いては熱心に詩作に勤しみ，詩集をいくつか出版しているが，自費出版のものもあり，それらが世の評価を受けることはほとんどなかった。他界間際に執筆した小説の遺稿（1891）が死後発見され，編纂されて発表された中編小説『ビリー・バッド』（1922，再編纂 1962）が，小説家メルヴィルの絶筆となる。

この『信用詐欺師』の内容を一口で言えば，ある年の 4 月 1 日の夜明けに，ミシシッピ川下りの定期客船の出発直前に乗組む白人の聾唖を装った信用詐欺師が，深夜までのわずか一日の間に，黒人の物乞いの不具者を皮切りに次々と八度も姿を変え，あの手この手で船客から金銭を騙し取ったり，金銭を取らずとも，彼らの心をつかんで信頼を勝ち取ってゆく物語，となろう。

ただ，物語と言っても，これまでの長編小説の物語とは明らかに異なっている点がある。

第 7 作『ピエール』以来雑誌小説でも用いるようになった第三人称の語り手は，第一人称だった第 6 作までの長編小説ほど多弁ではない。前半ではこれまでとはあまり変わらず，舞台背景など読者に作品の冒頭での必要十分な情報を提供するために，語り手は登場人物の言動を語り，時に彼らの心理状態の説明を施し，さらには作者自身の肉声かと思われるような意見を吐露したりもしている。だが，後半以降は一歩も二歩も退いて，演劇の台本のト書きのような，舞台上の登場人物を取り巻く周囲の簡潔な状況説明に終始しており，登場人物の詐欺師とそのカモとなる相手の乗客との対話が大いに幅を利かせている。まるで語り手自身が舞台とは逆の観客席側で，演じられる登場人物の対話を眺めているかのようだ。

また，それまで把握し易かった作者メルヴィルの世界観，宗教観は，主として詐欺師のカモとなる乗客の信頼を得るための対話の中に垣間見られるのだが，人を担ぐのが仕事の中心人物の詐欺師の発話のどこからどこまでが作者の本音なのか見極め難く，またカモを中心とした他の登場人物のどの見方に作者の力点があるのかも，それまでのどの作品よりも判然としにくい。

いま，一応，本稿の筆者も物語の要約を試みたが，研究者ジョン・ブライアンは『信用詐欺師』を評して，次のように述べている。

メルヴィルの最後の発表された散文の虚構作品

（それを小説と呼ぶのにためらいを覚えるのは，まさしくその構造そのもの ── 小説，解剖，寓話，風刺，喜劇 ── が，かなりの論議を要する問題だからだ）は，現代の読者にとっても相変わらず一番とっつきにくいままだ。ユーモアはわざとらしく不自然で，寓意と風刺の典拠はぼやかされ，語り手は作品と距離を置き，登場人物は特定し難く，文体は入り組んでおり，皮肉は難解で，規準となる価値観が見つけにくい ── 実にこの作品は複雑であり，話の筋を無理なくまとめるには，ある意味で偏った解釈をさらけ出さざるを得えないほど困難である。それゆえ間違いなく，『信用詐欺師』は，メルヴィルの問題小説なのである[1]。

その扱いは一筋縄では行かないと評しているわけだが，この小論では，実際に物語の内容を検討して，本稿筆者の「偏った解釈」で視野狭窄が暴露されるのを恐れつつ，筋をまとめながら，この「問題小説」の主題の探求に挑戦してみたい。

すでにごく簡単に紹介したように，冒頭で川下りの定期客船に乗組む白人の聾唖者がこの小説の最初の登場人物である。この人物が「信用詐欺師」であるとしたのは，物語を通読し，数は少ないが作品中に散見される手がかり ── あとで折あるごとに触れることになろう ── と，作品の副題とを考え合わせて至った結果である。

いま手がかりと言ったが，この最初の登場人物が「信用詐欺師」であることも，また，この人物以降に物語に登場する信用詐欺師がすべて同一人物であることも，ともに確証するものはない。作品の副題「その仮面舞踏会」（*His Masquerade*）の「その」は日本語表現の慣例でそう訳したが，直訳すれば「彼の」（*His*）であり，副題の直前にある「信用詐欺師」（*The Confidence-Man*）を受ける単数の所有格代名詞であるこの「彼の」も，「信用詐欺師」という表記自体が単数代表を意味するとすれば，物語に登場する信用詐欺師は複数だとも解せなくもない。仮に複数の詐欺師が登場しているのだとすると，彼らひとりひとりが，披露されるそれぞれの詐欺話の主人公となる可能性もあり，作品自体は異なる詐欺師の連続競演の物語ともなる。そのさい，詐欺師がカモにした乗客が次の詐欺師の時でも同じくカモになっている場合では，詐欺師が仲間同士であることが条件となる。それは，最初の詐欺師はこの同じカモの情報を次の詐欺師にきちんと伝えねば，次に登場する詐欺師がうまく接近し再び欺すことは困難であるような場面があるからだ。だが，この情報伝達には多少時間を要するのでなかなか容易ではない。やはり，次の詐欺師は目立たぬように最初の詐欺師の仕事現場周辺にいて，そのカモとのやり取りをすべて把握し，それを踏まえて同じカモを欺す方のがはるかに自然であろう。

このように，複数の詐欺師登場説は物理的 ── 時間的，空間的 ── には合理的のように思われるが，実際の詐欺師の巧妙な手口，特に時事的で形而学上的でもある話題内容を含む話術を考慮に入れると，詐欺師が，前のカモとのやり取りで得た情報を巧みに活用して詐欺の成立に導けるような知性の同一人物であった方が，より自然に感じられる場面が多いのだ。

一方，すべて一人の詐欺師の自演だとすると，逆に，読者からすれば物語を追ってゆくにつれ自然と湧いてくる素朴な疑問もある。それは，詐欺師が次の詐欺師に扮して再登場するのは章で区切られたあとも多く，章と章の間には時間の経過があったのだと納得できないこともないが，読後感としては詐欺師が姿を変えて次から次へと間断な

く現れる印象があまりにも強く，いったい彼は――あるいは実は，彼女なのかも知れない――変装時間と人知れず変装できる場所を，さらに服装・小物類などの変装用具の保管場所をどう確保しているのか，という疑問である。ただ，この種の疑問は，読者によっては，手練れの詐欺師が定期船のどこか人目につかぬ特別な場所で密かに保管しておいた用具で，神業のごとく短時間で変装するのだろうと，一笑に伏すこともできる類いのものかも知れない。

詐欺師複数登場説で読み進めて行った場合，『マーディ』の同行者たちの対話場面を思い起こさせるような，場面ごとに異なった詐欺師と異なるカモの対話だらけで，ただでさえ川下りの蒸気船の船中を唯一の舞台とし，これと言った活劇が無く変化のひどく乏しいこの長編小説は，ますます興ざめの，面白味のない小説と化し，それまでの雑誌寄稿小説同様，せいぜい執筆当時のアメリカの，今回は中西部の，世相――とくに世間を騒がせていた詐欺師の実相[2]――が活写された素描集にすぎなくなる。物語の一つ一つの詐欺話が『詐欺師』という単なる総称的題名で束ねられているだけの作品に堕ちてしまうのだ。

この問題は単独説，複数説どちらの側にしても最終的に正解はないと思われ，作品をより面白く読み，よりよく解釈したい本稿の筆者は，少なく不確かな手がかりを頼りに単独説の立場から，つまり，すでに紹介した要約通り，最初の登場人物である白人の聾唖者がこの物語に出てくる詐欺師であり，以降の詐欺師の最初の姿と解釈する立場から，作品の検討・解釈を進めてゆきたい。

1

物語は，「ある聾者がミシシッピ川の船に乗る」(9)[3] と題される第1章の，次のようなパラグラフで始まる。

> ある4月の初日の夜明けに，チチカカ湖でのインカ帝国の伝説の初代王マンコ・カパックのように，セント・ルイス市の水辺に突然姿を現わしたのは，乳白色系の色をとりあわせた服の男だった。
>
> その頬は色白で顎はうぶ毛で覆われ，髪は亜麻色，帽子は白い毛皮製で毛羽の部分は長くふわっとしていた。彼には，旅行用の大型鞄や手提げ鞄，また，カーペット地の手提げバッグや小荷物もなかった。赤帽もいなかった。一緒の友もなかった。乗客のすぼめた肩，つぶやき，ささやき，いぶかしげな様子から，明らかに，この人物は正真正銘のよそ者だった。

次に，「男は姿を現すやすぐさま，格別人気のあったその蒸汽船フィディーリ号に足を踏み入れた時，船はまさにニューオリンズに向けて出航するところだった」と語られているので，この男が一介の旅人であるのは確かだが，旅人であれば，普通，こうような汚れのつきやすく，また汚れの目立つ出で立ちはしない。このような伊達な，気障っぽい服装をする男なら，当然，着替え（の服）を入れた大型の鞄を持参していそうだが，身一つであるというのは何を意味するのであろうか。

すでに乗り組んでいる船客からじっと見つめられながら，男は下甲板を進んで，「たまたま船長室近くにあったポスター」のところで歩みを止める。それには「近ごろ東部からやって来たと思われる得体の知れない詐欺師」に対する賞金が記されており，「それがどのような点でかは明らかではないが，詐欺師でもまったく奇抜な才能」の持ち主とあり，「そのあとに細かな身体的特徴」が

記されていた。

実際には読者にはその特徴は一切伝えられていないが，「まるで演劇のポスターであるかのように」（10）この手配書に乗客が押しかけて見ていると，乗客には「ペテン師」が紛れており，ポスターを見るふりをして他の乗客から金銭をいただこうというスリや，乗客に声を掛けてかつての大物の「山賊」や「海賊」などの「盗賊」の「一代記」を売りさばこうとする小者がいたりした，と語られる。後者は，当時の〈呼び売り商人（chapman）〉のことだろう。語り手は，これらの「オオカミ」と目されるかつての大物悪人は姿を消し，いまの時代に跋扈するのは「キツネ」と目される詐欺師だと説明する。時代は強力の大悪党が闊歩した人口の少ない未開発の西部から，悪知恵を働かせて金銭泥棒のはびこる発展途上の西部へと移り変わってゆくさなかだというのだ。

やがて男は，人相書きと同じ高さに，なんと「愛は悪事を企てない」（11）と書いた小型の石版を掲げて乗客に見せる行為に出る。

乗客は，男を「妙に悪意のない」様子の人物で，その内容とともに「どうも時と場所にそぐわないと思う」。日曜の礼拝時でもなく，教会の礼拝所でもない，夜明けの船上だからだ。割り込んできたこの男を乗客は，脇に押しやったり，その帽子をたたいて平らにしたりする。ところが男は，帽子を被り直しもせず，石の平板に今度は「愛は粘り強く，情け深い」と書いて掲げる。乗客は「口汚い言葉やこぶし」を浴びせながら，またも彼を脇に押しやると，男は抗うことなく再び「愛はすべてを忍ぶ」と書き換えて，凝視とヤジのなか，盾のようにして平板を持ってゆっくりとその場を去っていくが，途中振り返って，「愛はすべてを信ずる」，さらに「愛は決して滅びない」（12）と書き換えて平板を掲げる。

「愛（charity[4]）」を主語とするこれらの短い金言は，聖書の『コリントの信徒への手紙一』第13章4節〜8節からの引用，あるいは，同章5節にある他の文の述部の前に主語の「愛」を置き，文章化したものである。

このあと語り手は，石版を掲げ乗客に博愛の精神を訴えた男とは「対照的」に，川下りのこの大型定期客船の床屋が当日の開店準備の様子を紹介している。それは，床屋が「掛け売りお断り（No Trust）」と「派手な，けばけばしい飾字で」記された手製の看板を「店の扉の上にあるいつもの釘に」掛ける，開店準備の光景にすぎない。だが，この看板の文句は文字通り〈信用するな〉の意ともなり，白服の男が石版に記した〈人を信用しよう〉という趣旨の短文による訴えの直後の床屋の看板の提示は，作者からの，男の言うことを安易に「信用するな」と周囲の乗客への，ひいては読者への訴えのようにも解せる。

このように物語の早い段階で語り手に主人公に待ち構えている受難を暗示させ，読者に物語の前途への不安と期待を抱かせようとする手法はメルヴィルの常套手段であり，これと似た手法が，雑誌掲載小説以前のいくつかの長編小説 ── 『レッドバーン』，『ホワイト・ジャケット』，『白鯨』など ── にも認められる。

語り手は，男がこのあと移動のさいに「大声で」注意を喚起しながら荷物を運ぶ赤帽と接触して，危うく突き飛ばされそうになる出来事を紹介することで，男が「口がきけないばかりか，耳も聞こえない」ことを伝えようとする。そして，男が船首楼の，船員が「上甲板に行き来する階段の近くの」「奥まった箇所に座り込」（13）み，旅の疲れか，居眠りを始めると，語り手は，「甲板船客［＝船室を使わない三等船客］として，この見知らぬ男は単純そうに思われるが，その場所［奥まった

箇所］を全く知らないわけではないのは明らかで」，服装の汚れなど外観から「すでにかなり遠方からやって来たと思われ」，「おそらく手持ち鞄がないので，目的地は数時間以内の航程にある，途中の小乗降所だろう」と推測する。語り手は次の第2章で，男が「まもなく二，三度停船したあと彼自身もたぶん，目覚めたあとに姿を消したのだろう」と説明しているが，これも推量にすぎず，読者に男が実際に下船したかどうか確かめる術はない。

また，語り手がわざわざ，白服の男が居眠りをし始めた階段近くの「その場所を全く知らないわけではないのは明らかで」と言及しているのは，男にとってこの大河の船旅が初めてではないことを示唆しており，読者の意識は自然と「船長室近くにあったポスター」の「近ごろ東部からやって来たと思われる得体の知れない詐欺師」とこの男の関わりの有無に向かうことになり，作者の意図的な示唆と言える。

第2章の冒頭で，眠りこけるこの男に対するさまざまな感想が紹介されている。メルヴィルの長編小説には作品の各章に例外なくその内容を示す長短の題名が付いているが，この章は「十人十色を示す」という章題になっており，この感想がそれぞれ違った乗客の発したものだと解せる。

順に示してみると，「変わった新参者だな」，「可哀想なやつだ」(14)，「どんな正体なんだろう」，「野生児さ」，「おやまあ」，「珍しい顔立ちだ」，「ユタから来た青二才のモルモン教徒さ」，「ペテン師さ」，「ちょっとないおめでたさだね」，「何かあるな」，「霊媒さ」，「間抜けさ」，「哀れを誘うね」，「関心を引こうとしてるのさ」，「奴には注意しろよ」，「こんなとこで寝込みやがって，疑いなく船内の盗人だ」，「日中のエンディミオンってとこだな」，「脱獄囚さ，素早く身をかわしたもんで疲れ切っちまったな」，そして最後が，「ルズ［ベテル創35：6］で夢見るヤコブさ」となっている。世相が垣間見られるようなこの語句群から，作品で扱われている時代が執筆時の1856年とだいたい同時代であることが推定できる[5]。

乗客の男への感想が紹介されたあと，種々雑多な乗客が行き交う白い巨大なこの客船フィディーリ号が，本流の全長が3779キロメートルあるミシシッピ川の，5割強の1962㎞の距離を上下する他の蒸気船同様，さながら「浮島の白い漆喰を塗った要塞」(15) のような存在であり，両岸にある各船着場で客の乗降があり，「常に新来者で一杯だが，絶え間なくさらにいっそう見知らぬ新来者を加えたり，入れ替えたりして」おり，すでに先ほど触れたように，熟睡していた乳白色の服の男も「まもなく二，三度停船したあと」，「たぶん，目覚めたあとに姿を消したのだろう」と語られている。そしてこの章末は，この船には万国のさまざまな「顔立ちと服装」(17) をした人々[6]が乗船しており，あたかも諸国民の代表者の集う「国会」といった様相を呈し，まさに多くの支川を集めた大河ミシシッピ川のように，「ここには西部の威勢のいい，強力に一体化させる息吹が一様に感じられた」と，結ばれる。

次の第3章ではすでに冒頭の要約で紹介したように，まず，船首楼に「粗麻糸の服を着，片手にタンバリンの振るい手を握った，足の不自由な異様な黒人」が登場する。

「足の具合がよくないために，ニューファンドランド犬の背丈になっていた」この「ブラック・ギニー」という名の黒人は，乗客の集まる場所に姿を現し，タンバリンを片手に身を低くして犬のように這いつくばりながら施しを求め，口に銅貨を投げ入れてもらう。乗客がおもしろがってこの慈善「ゲーム」(19) に興じるさなか，居あわせた「片方が義足」の男が突然，この黒人「の奇形

はペテン」だとしわがれ声で訴え始め，乗客の銅貨投げに水を差してしまう。誰も義足の男を制止しなければ，彼は黒人を「裸にしてから追い払ってしまったかも知れなかった」が，結局，乗客に遠ざけられてしまうのは訴えた彼の方だった。

しかし，この義足の男の指摘はそれまでは疑いもしなかった乗客たちに黒人の素性に対する疑惑を芽生えさせ，詮索が始まる(7)。乗客らは黒人に，真に不自由であることを証明する「書類」があるかと返答を迫り，黒人は「ない」と答えて窮する。すると，そこへ現れた若い聖公会の牧師が，彼に「ちょっとでも口添えしてくれる者はないのか」(21) と尋ねてくれる。この助け船に黒人は，乗船中の知り合いだとして8名の人物を挙げる。それは実名ではなく，「喪章を付けた紳士」，「灰色のコートを着て白いネクタイをした紳士」，「大きな本を持った紳士」，「薬草医」，「黄色のチョッキの紳士」，「真鍮の名札の紳士」，「スミレ色の服の紳士」，そして「兵士」といった具合に，外観や職業名で表された人物だった。これを聞いた牧師は親切にも，黒人の身元保証人としてこれらの人物を捜しにその場を離れてゆく。

すると義足の男が再び近づいてきて，「無駄なことだ」，そんな人物はいない，「やつはどこかの白人の悪党で，ひどく体をよじって色を塗り偽装してい」て，「やつとその仲間［黒人の挙げた8名］はみなペテン師だ」と訴える。これに対して，居あわせた元従軍牧師のメソディスト派の好戦的な牧師が，「おまえは慈悲の心を持ち合わせていないのか」(22) と非難すると，義足の男は「愛と真実は別だ，やつは悪党だ」と言い返す。牧師が「善意ある解釈はできないのか」，「彼は正直そうに見えないか」と質すと，男は「見た目と実際は別さ」と応じ，さらに「おまえさんの慈悲心と一緒にその古巣へ行きな，天国へな」，「この地上では本当の慈善は朽ち，偽の慈善が謀る」，「慈善など糞食らえだ」と毒づき続ける。

言葉で説得できず業を煮やした牧師がとうとう力に訴えて男のみすぼらしい外套の襟をつかんで揺すぶると，周りの乗客もこれに声援を送る。身を振りほどき，自分の主張に賛同が得られない義足の男は，その場から立ち去る際にも，後ろに顔を向けながら牧師とやり合い続け，牧師と乗客を「愚者の船の，愚者の船長が従える愚者の群れ」(23) 呼ばわりする。今度は牧師が「あそこでよろよろ歩いてゆくわい，やつの偏った人間観を象徴するその一本の脚でな」と言うと，男は「だがおまえたちの化粧したおとりを信じるがいい」，「そうすればそれがわしの仕返しになるからな」と応答し，そして，乗客の心に根強い不信の種を蒔けたと言って，離れてゆく。

この元従軍牧師が「今回のことから教訓を得ようではないか」(24) と説教じみた言葉を発すると，乗客から肯定的な答えが返ってきたので，物乞いの黒人はこれで自分を信用してくれるだろうと乗客に訴えてみると，否定的な答えが返され，信用するのは証人捜しに行った若い牧師が戻ってからだと言われてしまう。

すると乗客の中からただ一人，ロバーツという名の地方の商人が「信用する」(25) と言い出し，黒人に小銭を恵もうと財布から「50セント」を出す。そしてその際に，図らずも「名刺」を落としてしまう。それに気づいて拾ったのは，お金を恵んでもらった当の黒人だった。他の乗客は依然として黒人に対して不信を抱いており，彼は信じてくれるよう訴えるが，自分で証人を捜しに行かないのかと問われ，自分の足の不自由さを理由に「証人の方から来てもらわなければ」と返答し，「あの優しい喪章の紳士はどこにいるのだろう」と，例の8名の知人のうち最初に挙げた人物を口

に出して嘆く。

そこへまだ乗船切符を持っていない乗客への乗客係の呼びかけがあり，切符を手に入れようと彼らが船長室に向かったために，周囲の人影は疎らとなる。やがて黒人自身も「恐らく同じ目的で」姿を消した，と再び語り手による推測的な説明がなされたところでこの章は終わる。語り手の推測通りであれば，船長室で切符を得た乗客があとからやってくる黒人を再び取り囲む事態が発生するのではと危惧されるのだが，この黒人が再び姿を現すことはなく，読者の杞憂となる。

証人を捜しに出た牧師が戻って来て再登場するのは少しあとの第6章（38）だが，当の足の不自由な物乞いの黒人は次の第4章以降，二度と姿を見せず，物語は彼の挙げた8名の人物の大半が，一人ずつ次々と現われては消えてゆく。だが，同時に二人の人物が登場することは決してなく，それぞれが登場する場面の中心人物として，乗客相手の遣り取りをする話が綴られてゆくことになる。

第4章では，前章の終わりに黒人が嘆きながら挙げた知人，ジョン・リングマンという名の「喪章を付けた紳士」── 帽子に黒い布を巻いたこの男は，これもあとの第12章で判ることだが，離婚後死去した妻の喪に服していた（69）[8] ── が登場する。黒人が拾ったはずの名刺を利用して，その持ち主だった商人ロバーツに接近して取るこの男の一連の行動から，読者は初めて，物乞いの黒人が義足の男の指摘通りの真っ赤な偽物の「ペテン師」であり，第1章の初めで言及されていた，いまの時代に跋扈する「キツネ」（10）と目される小者の詐欺師であることを知らされ，さらに，船長室近くにあった手配書で言及されていた懸賞金付きの詐欺師や乳白色の男のことまでも，想起させられるに至る。また，この男の石版によるメッセージ掲示のあとに出てきた，船中の床屋の看板「掛け売りお断り（No Trust）」（12）も，すでに触れたように，「信用するな」の意に実は力点が置かれていることがハッキリし，さらに，あたかも世界の縮図であるかのように諸国民の代表者の集う「国会」といった様相を呈していると語られていた，「信心深い，信頼するに足る」という意の船名の蒸気船フィディーリ号は，「善意」や「慈善の心（charity）」，つまり「愛（love）」の希薄な，あるいは欠如した世の中の象徴と化してゆくのである。

さて，この喪章の男は，商人ロバーツに彼が落とした名刺を振りかざして自分は知己だ，忘れたかと偽って近づき，困惑する相手を尻目に，さらに商人がメーソン会員だと聞き出すや，同じ会員の誼で金に困っている友に1シリング貸してくれないかと頼み込み，自分が陥っている苦境を告げると ── その苦境自体の内容はまったく語られていない ──，人の好い商人はこれを信じて同情してしまう。彼が「恐らくそれ以上の額の」「紙幣」（30）を「義援金」であるかのように差し出してくれたので，喪章の男は借りるのではなく，これをそのような金であるかのように受け取っている。

読者は当然すぐに，喪章の男の一連の言動が人の情けにつけ込んで金を騙し取る詐欺行為だと判断すると同時に，いま上で触れたようにこれまで読み進めてきた物語の，詐欺師への言及箇所を想起し，物乞いの黒人は実は物語の題名にある信用詐欺師であり，彼がその口から自らの身元保証人として挙げた人物も彼自身，つまり，姿を変えただけの同一人物であると判断し，物語の今後の展望として否応なく，この詐欺師が何度も変身して登場し，同じ様に乗客を欺いてゆくのだろうと推測することになる[9]。

物語の冒頭に登場した乳白色の服の謎の白人も，石版によって説教師のごとく人々へ世の中の慈悲

が希薄な心を悔い改め，善良なクリスチャンたれとのメッセージを伝えていたが，その行動は直後に登場する物乞いの黒人に対する乗客の慈善行動への地ならし，さらには促進剤の役割を果たしている。また，この白人が眠りに落ちた階段付近は「船首楼」(13) にあり，次の中心的登場人物である黒人が姿を現すのもまた「船首部」(17) であり，白人の途中の河畔の船着場での下船が，すでに紹介した通り，あくまで語り手自身の推量の域を出ない以上 —— 作者が意図的に登場人物の行動を曖昧に伝えようとしているようだが，この時点では，その意図はまだわからない ——，実際には，義足の男の指摘通り，黒人は白人の，つまり，物語冒頭に登場する乳白色の服の白人の，変装とも解せるのである。

2

少額にせよまんまと金をせしめていったん立ち去った喪章の男だったが，思い返したかのようにすぐ商人ロバーツの許に戻って来て，返礼にと，たまたま所用で船に乗り合わせている石炭採掘会社の「社長で株式の名義書扱い代理人」から直接会社の株を買ってこれを売ると，得ている内部情報から大儲けができると彼に教える。

ところが，実はこれも喪章の男の詐欺の手口なのである。そうと判るのは後の第 10 章で，この商人がその会社の台帳を持った当の社長ジョン・トルーマンに遇い，社長から初対面の人間を信じてもいいのかと断られても，喪章の男の情報を信じ込んでいる商人が社長に株の購入依頼をし，取引後に彼と歓談する場面 (64) が出てきた時に，喪章の男が商人にガセネタを与えておいてから，姿を変えて台帳の男 —— 物乞いの黒人の挙げた第三番目の「大きな本を持った紳士」に当たる —— として商人の眼前に再登場し，株を買わせて今度は大金を騙し取るからである。

さて次の第 5 章の冒頭では，この喪章の男が株情報を与えた商人と別れたあと，しばし瞑想に耽り「憂いに沈んで」(33) いる姿が紹介されたあと，男は近くにいたタキトゥスの書を手にした身なりのよい大学生に近づいてゆく。男は大学生に悲観的な人生観を抱いてしまうからこの「異端者」(36) の書は読むなと説得し始める。さらに，楽観的であれと忠告し，世の人々の信頼の欠如を指摘したあと，大学生に「自分を信頼できるか」と初対面の者には答えにくい問いかけを平然とする。突然声をかけられその上忠告までされて困惑する学生は，礼を欠いたこの男になぜか「魅せられてしまう」ものの，返事を得られず残念がる男をあとに残し，何とか離れることができる。

喪章の男が声を掛けたこの若者はただの学生であり，詐欺とは何ら関わりのないように思われるが，やはり先の第 9 章で，すでに紹介した商人と同様，株の儲け話で「大きな本を持った紳士」姿の，すなわち台帳の男の詐欺師のカモとなる。その場面が訪れる直前で，すでにこの第 5 章でもその外観的な身なりのよさで金持ちの子息であることを匂わせてはいたが (33)，南部の大農場の御曹司であることを明確にしようとする作者の意図がうかがえる，学生自身の発言が第 9 章で用意されている[10]。カモはそれなりに金を所持していなければならないことを，遅ればせながら伝えようとしているかのようだ。

ただ，物語全体からすると，まだ金銭の絡まないこの第 5 章の場面での学生の話は，すでに触れたように，対話が中心となっている詐欺師がカモから金をとる話より，相手の信頼を得て，厭世的な人物の心持ちを楽天的なそれに変えるといった話が多くなってゆく後半の有り様からすると，作

者側のその予告および布石という重要な働きをしているとも言える。

次の第6章では，もはや喪章の男の姿はなく，登場するのは物乞いの黒人が二番目に挙げていた「灰色のコートを着て白いネクタイをした」男である。読者はやはりその身なりの描写と合致することから，すぐさまこれも次の変装をした詐欺師だな，と認識できる。実際の登場はすでに「喪章の男」から「大きな本を持った紳士」への言及がなされるあとなので，三番目の登場，という印象を抱いてしまいがちになるが。灰色のコートで白いネクタイのこの男は政府のインディアンに対する非人道的な居留地への移住政策により災禍を被ったセミノール族の「寡婦・孤児救護院」(37) の職員だと紹介されており[11]，乗客から救護院への寄付を募る。だが彼も前出の黒人同様に，勧誘の声を掛けた乗客の二人の紳士の一方から，「ペテン師」だろうと言われたりする。

そこへやっと，物乞いの黒人の身元保証人を船中に捜し求めていた例の若い牧師が戻ってくる。牧師は職員の服装を見て，捜していた人物にやっと出会えたと思い，当然ながら，職員に黒人のことを聞く。職員が黒人のことはよく知っており，自分の乗船した船着場で彼の下船を「手助けした」(38) と告げると，牧師は，職員が見つかってよかった，さもなければ自分も黒人への不信が解けなかっただろうと安堵する。

すると背後から再び，牧師の黒人への信頼を嘲笑うかのような高笑いをしながら例の義足の白人が現れ，彼は高笑いの対象は牧師ではないと断ってから，独身のフランス系老アメリカ人の話を始める[12]。

その話は，この老人がある演劇に登場する「貞節な妻」(39) を観て感激し，自分も「欠点と言っていいほど開放的すぎる」婦人を妻に娶る。周囲の者が妻の行状を耳に入れるが老人はこれを聞き入れず，ついにはあるとき老人が旅から帰宅すると，部屋の凹所から飛び出してきた男を目撃し，やっと「疑い始める」という内容である。義足の男は話を語り終えると，その場から去ってゆく。この話は，先ほどの〈安易な信頼は危うい〉という義足の男の主張からすると，同じ教訓を伝える話である。

この義足の男はどなたかなと，新参者を装って素知らぬふりで尋ねる職員姿の詐欺師に，牧師は物乞いの黒人に嫌疑を掛けた張本人だと教え，さらに「彼［＝義足の男］がギニーはどこかの白人の悪党で，ひどく体をよじって色を塗り偽装している，と言い張っていた。そう，彼はまさにそう言ったと思う」(40) と説明する[13]。職員はぬけぬけと，「そんな分からず屋ではないはずだ，彼を呼び戻してください，そして彼が本当に本気かどうか尋ねさせてください」と言って，牧師に願って義足の男を呼び戻してもらう。

職員は戻ってきた義足の男に，黒人への疑惑は冗談で口にしたことで，「本当はやさしいのでしょう」と尋ねると，「そんなことはない，わしは酷いぞ」，「やつはわしが言った通りの人間」で，「黒人を装った白人だ」と主張する。職員が，本当に白人がそれほどまで黒人に見える」としたら，「なかなかの名演というべきでしょうね」と感想を述べると ── 読者からすれば，自分の変装の出来映えの自画自賛と同時に，まさに同一人物が目の前にいることにまったく気が付かない相手への嘲笑となる物言いである ──，「誰にもましてうまいというほどじゃない」と返答される。そこで職員は「どうなんでしょうね。世の人はみな演じているということですか。例えばわたしは役者ですか。ここにいらっしゃる牧師さんも演技者なのですか」と問うと，男は「その通りじゃ，二人とも

演じておらんかね。行為は演じることだ。だから行為者はみな演技者なのだ」と返す。人生そのものが舞台で，人はその生き様を演じる役者だというのだ。

職員は「ふざけたことを言っている」と批判し，動かしがたい事実として黒人の脚の変形について問うと，男は「眼力のある目には」，「脚が吊り上げあげられている」のが容易に分かるのだ，と答える。詐欺師である職員は，黒人を指弾する男がそれと知らずに，まさに自分が詐欺師として役柄を演じていることを指摘していることに，心中で秘かに，義足の男の寸言は少しも「ふざけたこと」ではなく，〈まさにその通りだ〉と肯定しつつ，「職員という」役柄を演じている以上，それに合わせた否定的発言をせざるを得ないわけである。

職員は黒人を船着場で下船するときに自分が手伝ってやったことを牧師に今しがた告げたことを忘れたかのように，「すぐに彼を見つけて，文句を付けられないほどこの無礼な憶説を論破してやりましょう」と勢いづく ── これは詐欺師扮する職員がわざと感情を高ぶらせていることを示す発言で，もちろん，周囲へ意識的なの作為である。すると義足の男は，もし黒人を連れてきたら，先ほどは周囲に制止されてできなかったが，「やつの塗装部に爪の筋を残してやって」化けの皮を剥いでやる，とわめく。

その黒人を自らの手で下船させたと言ったことを牧師に思い起こさせられたふりをする職員は，黒人がいなくとも彼にかけた嫌疑が「過ち」であること「を確信させてやろう」（41）と義足の男に対して，「聞いたところからすると，わずかな額の銅銭を得るために」，「わざわざ手数をかけて危険を冒す」者がいるだろうかと詰問する。すると男は，「この青二才めらが。金こそがこの世で苦痛や危険，詐欺や非道の所行のただ一つの動機だと思え。悪魔がイヴをたぶらかしてどれほど稼いだことか」[14] と毒づき，立ち去ってゆく。

その後ろ姿を見ながら職員は，「どこのキリスト教社会でも口をつぐまされておくべき人間だ」，「われわれは不信には耳を塞ぎ，その逆にのみに開けておくべきで」，「わずかな不信の兆候でも抑えることですよ，どんな挑発によってでも頭をもたげてくるものですからね」（42）と言って，牧師の賛同を得る。さらに，職員が「思いやりのある人には，不信の悪魔はある種の毒のように作用します。そのような人の心に入り込んで，一時，長かろうが短かろうが，その心に沈殿している悪魔なのです。猛威を振るえば，いっそう嘆かわしいことになる」と付け加えると，この牧師は義足の男に疑念を植え付けられ，反論もしなかった当初の自分を反省して，なかば独り言のように，「本当だ，その通りだ，わたしはあの片足の男の影響を受けて言いなりでいたのは悪かった。良心が厳しくわたしを叱責している ── あの哀れな黒人」と言ってから，職員に向かって「彼には時々会うのでしょうね」と尋ねる。

職員から「しょっちゅうというわけではないですが」と返されて，牧師は，「この少額ながら精一杯の寄付金を受け取ってくれたまえ。彼に会ったときに手渡し，その正直さに全幅の信頼を置き，いかに束の間だったとはいえ，逆の思いに耽ってしまったことを心から申し訳なく思っている者からと言ってね」と依頼する。職員は了承したものの，なんとこの機に乗じて「ところで，これほどの本当に慈悲深い気質のあなたですから，セミノール族寡婦・孤児救護院のための募金の要請を拒否なさならないでしょうね」と言い出す。「そのような慈善施設は聞いたことがないが」と言う牧師に，「最近できたものです」と職員は答え，詮索の目で見る牧師に「あのかすかな悩みの種［＝疑

惑］がはやくも働き始めたのでしたら，わたしの訴えは無駄でしたね。失礼」と語って，去ろうとする。すると牧師は「前の疑いの償い」に，幾ばくかの義援金を寄付すると言って，自分の慈善行為の証となる「奉加帳」の有無を尋ねる。

語り手はこの対話から読者に，牧師が義援金を託したのは，聖職者として慎むべき，根拠のない不信を抱いたことへの後ろめたさときまりの悪さから，反動的に募金でその場を繕う行為に出たにすぎず，純粋な贖いの気持ちとして生じた行為ではないことを伝えようとしている。さきほどの自らの言葉通り，生業として人を欺くための「演技」を日頃行い，今は職員に扮している詐欺師からすれば，牧師の心の動きなどは手に取るように分かり，相手を意のままに操ることはたやすいようだ。

牧師の求めに応じて職員は備忘録と鉛筆を出して見せ，「氏名と寄付額」を記して「氏名は公表する」と返答し，「施設の小史とどんな神の計らいで新設の運びとなったのか」牧師に語ろうとするところで，この章は終わる。

3

ところが続く第７章の冒頭で語り手は，職員は話し始めた施設の話の途中で，「もともとその場にいた」のに気づかなかった「紳士」の存在に目を奪われて，そちらに気が行ってしまい，牧師に「失礼，向こうに寄付を，それもたくさんしてくれそうな御仁がいます。わたしが失礼しても悪くお取りにならないように」と言って牧師に許しを得た，と語る。もちろん，「たくさん」という牧師への当てつけめいた言葉から判るように，牧師の本質を見抜いている職員はその寄付金の少額さにあきれ果てて彼を見限り，視界に入った次の目標にすぐさま狙いを定めたのである。

職員は，その「愛嬌のある顔つきの」，「物腰の優雅」な紳士に近寄ってゆくが，語り手はここで，「善良」な感じのこの紳士の「善良さ（goodness）」（43）について解説し始める。

> 人の善良さはそれほど珍しいものではないことを考えると，この紳士を（人によってはこうした描写に程度の差はあれ，彼を非現実的に思われるほど）際立たせ群衆の中で一種の異邦人に見えさせているのは，よく見られる一特質の表出にすぎないというのは妙なことだった。彼自身の個人的体験について言えば，身体的にであれ精神的にであれ，ほとんど苦しみ［悪］を知ることなどなかっただろうような幸運と結びついた善良さが，彼のものであるように思われた。

ここでも語り手はあくまで外観から推測に基づいて登場人物の人となりを語っているが，紳士は内面も汚れのない「善良」そのものの人物であろう，と言うのだ。

それ以外のこの人物の特徴として，年齢は「45〜50」（44）歳ぐらいで，「妙にお祝いにふさわしく優雅に，上品に着飾って」おり，その手は蒸気船特有のことで「船上のあちこちには，特に手すりにはススが縞状に付着している」のにまったく汚れていないのは，彼の黒人の召使いが手足となって彼の世話をしていたからだった。そのうえ，紳士は「これまで一度も」災難に遭ったことがなく，「とても善良な人間であるというのは，非常に幸運なこと」だった。だが「その態度には何ら道義的であると語るものはなく，善良だと語っているのみで，善良であることは道義的であることよりはるかに劣」（45）り，「単に善人，つまり，生まれつきの善人は，善良であるだけでは絶対義人に

はなれず，完全に生まれ変わらないと道義的にはなれないほどなのだ」と語られる。

ここで，職員の次の詐欺の対象に過ぎないと思われるこの紳士の無垢に近い善良さを，なぜ語り手が義人と比較しながら貶めるような発言をしているのか疑問に思わぬ読者はいまい。その疑問は，紳士の見てくれの良さからそばに侍る黒人の召使いに注意を向けると，解ける[15]。

この召使いは，主人がまったく手を出さずとも代わりにすべてをこなしてくれる便利でありがたい存在のように思われるが，あくまで一奴隷なのである。そして，物語の舞台となっているのは，1850 年代の中頃の，その両岸に奴隷制度を認めない自由州と認める奴隷州が厳と存在するミシシッピ川を下る蒸気船上であり，時はまさに北部の自由州と南部の奴隷州が特に西域のこれから州に昇格しようとする領域での奴隷制の認否を巡る勢力争いで，対立しているただ中である。紳士の善良さを一見高く評価しているような語り手は，歩を進めて善人と義人の違いの話に及んでいるが，この主人の紳士が大農場の所有主かどうかは不明にせよ，寄付行為などは日常的な単なる消費と何ら変わらず，寄付行為が身上に相応しいものだと教えられて育った育ちの良さを感じさせる南部のお金持ちである可能性は高い。さらに，義人と比べると，いかに生まれつき善良な人であろうと，汚いものに対して自分では決して手を汚そうとしない人間ははるかに劣る存在であり，乗り合わせた船客の中には自由州出身であろうとなかろうと，奴隷制度に反対する人物もいるわけで，まして反奴隷主義者の厳しい視線などどこ吹く風と言った風な，召使いの置かれている黒人奴隷としての境遇それ自体に何ら人道的な問題意識を向けずに，当たり前のように身近に侍らせて何ら引け目も感じずに他人任せの暮らをするこの紳士は，義の人では決してあり得ない，と主張しているのだ。語り手が無垢に近い善良なこの紳士を貶めている理由はここにあろう。

だが，そのあと出てくる語り手の「その善人が，その義人，つまり灰色の男の会釈を受ける」という表現から，語り手がここで念を押すように紳士が「善人」で，「灰色の男」である職員が「義人」だと伝えようとしているのはわかるが，この「義人」の正体が詐欺師であることを知る読者は，その言動は基本的にまずほとんどは相手のカモである紳士を欺くための方便にすぎないであろう，と疑いを挟みながら読み進めてゆくことになる。

さて，その「義人」である職員からの救護院への寄付の要請に，「善人」である南部紳士は，その手のように「汚れのない」「未使用の紙幣 3 枚」を差し出して，額の少なさに許しを請い，いまは「今日の午後の姪の結婚式」で出かけてきているので ── ここで読者は初めて，紳士が「「妙にお祝いにふさわしく優雅に，上品に着飾って」いたのはこのためだと知らされる ──，金の持ち合わせがないと詫びを言う。礼を言おうとする職員に，金持ちの紳士は「慈善はある意味で骨折りではなく，贅沢なのだから」(46) とまで言う。だが，自分の代わりに手を汚して働いてくれる召使いら黒人奴隷たち ── 金持ちであれば，召使い以外に黒人奴隷を複数使っていよう ── がいて始めて稼げる金銭であるとすれば，実は汚れた紙幣を慈善に使うというのは，理不尽な行為そのものとなる[16]。そして，その紙幣を何のためらいもなく受け取るということは，あくまで詐欺が目的の職員にとっては，どのようないわれの金銭であろうと入手できればどうでもよいことになり，単なる守銭奴の詐欺師ということになる。このあとも姿を変えで登場する詐欺師は，その言動が主として詐欺をするための作為的なものであり，本人の本来の人間

性の発露なのかどうかを窺うのは難しいことになる。

このあと二人は「有機的な慈善方法に関して」，話を続ける。語り手は読者に，紳士が「現在のようにあちこちに孤立してある多くの慈善団体が集まって協力して行ってないことに遺憾の意を表した」と伝えたあと，「実際，そのような連合は，たぶん政治的に連邦が叶った場合と同様に，明るい結果を伴うかも知れない」と言葉を添えている。まさにこれは，1856 年という奴隷制を巡る南北の激しい対立期にこの作品を執筆していた最中の，この問題を憂いていた作者が語り手の口を借りて吐露した，対立を望まぬ偽らざる思いなのかも知れない[17]。

職員は，「わたしのほうが早いですよ」（47）と言って，体の不自由な人のために自ら考案した，人の体格に合わせ変形自在になる椅子を以前ロンドンで開催された国際見本市へ出品したことがあるという話をし，会場で「世界的大義に叶う何か世界中に役立つことをいまやろう」と思いつき，「世界慈善会設立趣意書を配布した」と言う。この団体は「現存の慈善協会や布教団体の代表者」で「構成」され，「世界規模の慈善の方式化を目的」とする組織だと説明し，さらに，世界中の「さまざまな政府に権限を持たせ，毎年，全人類に一大慈善税を課」（48）して「14 年で」「112 億」ドル集め，それで「貧民と異教徒を世界中から一人もいなくする」と言うのである。もちろん職員のこの発言が真実か否かは，この時点では不明である。

すると紳士は，慈善税の「地球の全人口に対して一人 1 ドル」（49）というのは「大金持ちに劣らず貧困者も貧困状態からの救済に貢献するし，キリスト教徒に劣らず異教徒も異教からの解放に貢献する」と思われるのだが，と問うと，職員は「それは……屁理屈ですね」と答えて相手にしないが，一本取られた形で，この紳士はここに至って知性は人並みの善人として描かれている。

職員は自分の企画「には特に新しい点はほとんどない」が，「ウォール街魂でもって，慈善活動を早めたい」，具体的に，例えば，ロンドンの貧民には手始めに，「2 千頭の雄牛と 10 万バレルの小麦を与えることを議決することに賛成」（50）で，中国の異教徒には大勢の「1 万人の宣教師団を送って上陸後 6 ヶ月以内にひとまとめに中国人を改宗させることに賛成だ」と，その内容を開陳する。ここで，語り手は，紳士が消極的な保守的な南部人の典型で，職員は大経済都市の積極的で進取の気性に富む北部人のそれ，という対立的な関係でもあることを示そうとしているかのようだ。

「きみはたいそう意気込んでいる」が，「それは，思うに，実際起こりうる奇跡と言うより，望まれる奇跡の例だね」と語る紳士の否定的な言葉を受けて，職員は「すると，奇跡の時代は過ぎ去ったのですかね。世界は古いというわけですか。不毛ですかね。［高齢なのに子を授かった］サラの場合を考えてみて下さい」と反論する。これに紳士は，「するとわたしは［サラの出産のお告げ役の］あの天使を罵るアブラハムかな（笑みを浮かべながら）」と受けて，「きみの企画全般について，大胆すぎるように思われ」，「本当にきみの世界慈善会が始動すると信じているのかね」（51），「障害を考えてみたまえ」と疑問を呈する。

「自信はありますよ」と応える職員はさらに，「自分は暫定的な出納係になり，喜んで寄付金を受け取り，当座はさらに百万部の趣意書の印刷に専念するつもりです」と説明する。このあとも職員は紳士に語り続け，熱心に「千年王国到来の約束を意識して，地球のあらゆる国々に広まっていた慈善の精神を明らかにした」が，紳士は「この

あとしばしの間，楽しげに信じられないといった顔で聞いていたが，やがて目的地に船が寄港したため，半ば可笑しみを覚えたような，半ば哀れむような面持ちでさらに紙幣 1 枚を彼に手渡し」，去ってゆく。

結局，職員の皮を被った詐欺師の目的は金銭を騙し取ることにあるので，カモの相手がどんな気持ちで寄付してくれようがかまわないことであり，一応の成功を収めたことになる。だが，今回は，世界規模の慈善の話の内容自体に疑問を持たれており，そこそこには知性が働く金持ちの紳士が相手を信用し寄付したというより，半信半疑でも彼にすれば小銭ならやっても実害がないから，ハエを追うがごとくにくれてやったと解せよう。

次の第 8 章でこの職員は，自分の企画を熱く語ったあと，「哀れをそそる謙虚さと慎ましさ」の漂った，「もともとの」「穏やかな雰囲気に少しずつ戻ってゆき」（52）[18]，船の女性客用談話室へと移動する。

職員の移動の目的は当然ながら新たな獲物を追ってのことだが，彼がソファの端に腰を下ろすと，反対側の端に座って『コリントの信徒への手紙二』の第 13 章を読んでいた未亡人の目を引き，彼女は手にしていた天金の小型聖書をつい床に落とす。語り手は，彼女は乳白色服の男が示した「愛」の石版を目撃していたと説明するが，詐欺師である職員がその現場を見られていたことに気づいていたかどうかには言及していない。いずれにしても，自分に関心を抱いたと判断した職員は未亡人に，「そのお顔に妙にわたしを引きつけるものがありますが」，「同信の方ですね」と小声で話しかける。そして，自分は「世の人々と容易には打ち解けられないのです。どんなに寡黙でも，ちゃんとした同信の兄姉と一緒の方がよいのです」（53）と言ったかと思うと，彼女にぶしつけに「あなたは信頼してますか」，「例えばこのわたしを，信頼できますか」と，尋ねる。「まったく見知らぬ人」に突然信頼を置けと言われても置きようがなく，当然，「飛び抜けて優しい心」の持ち主である彼女は言い淀んでしまう。

そこへすかさず職員は，信頼しているのなら「それを証明してみてください。わたしに 20 ドルください」とつけ込む。彼女がどんな用途でなのかと尋ねると，「言いませんでしたか」，「未亡人と孤児のためですと」と説明もしていないのにぬけぬけと応え，自分はセミノール族の「寡婦・孤児救護院」の募金中の職員だと紹介する。すると，そういうことなら躊躇してしまって申し訳ないとの言葉とともに未亡人が 20 ドルを渡すと，職員は記帳する素振りを見せながら，「あなたは信頼なさった，そう，あなたはわたしに例の使徒がコリント人に言ったと同様に言えますね，『わたしは，すべての点であなたがたを信頼できることを喜んでいます』（コリントの信徒への手紙二，7 章 16 節）と」（54）言って，去ってゆく。

今回の手口はこれまでとは違い，まず藪から棒に人を信用しているかと相手に迫ってびっくりさせ，相手が信用しないと返答すると，同信者なのに何という冷たい答え方をするのかと見下されてしまうのが嫌なことにつけ込んで相手にそう返答することをためらわせ，さらには，さあどうなのかと責め立てる。そして，つい口籠ってしまう相手に対し，ではその物理的な証に現金を出してみよ，と攻め寄って己の希望額を求めたのである。職員は，未亡人からその用途を聞かれると，ここで初めて教護院の職員で募金をしていることを伝え，相手の疑心を解き，一気に相手の慈善心を高める戦術を取っている。ここには，相手が淑女であれ，狙い定めたカモから平然と金を巻き上げるハゲタカのような詐欺師が描かれている。

次の第9章では，すでに触れた，物乞いの黒人が自分の身元保証人として3番目に挙げた人物である「大きな本を持つ男」に該当する，「ブラック・ラピッツ石炭会社」の「株券名義書換台帳」(54) を持った男が初めて登場する。すでに第5章で登場し，喪章の男に手にしていた書籍に関して忠告を受けていた例の大学生をつかまえ，この本を持つ男は素知らぬ顔で彼に，「喪章の男」を見かけなかったかと尋ねる。「あなたの来た方角の，向こうの舷門へ」姿を消した，と返答する学生の何気ない言葉の中に，観客である読者はこのくだりを執筆中の作者と同等のおかしみを感じざるを得ない。その方向からまさに喪章の男本人が密かにこの本の男に姿を変えてやって来ただけであることを知っているからだ。

この台帳の本の男は，「そうか，灰色のコートの男［＝職員］の ── わたしはいま彼に会ったところだが ── 言った通りだ。彼［＝喪章の男］は岸に上がってしまったに違いない。運の悪いことだ」と，自分の扮した二者を出汁に使ってこの学生を騙し，気安く接近して話し始める。

自分は喪章の男から金をねだられ，「そのとき忙しくて」つい邪険に断ったが，すぐに思い直してこの10ドルを渡そうとしたのだが，とあたかも後悔しているような振りをしながら，自社は「最近景気がよいから，寄付金の一つや二つぐらいは出」してもよかったのに，と学生の注意を自社の業績に向けさせる。さらにこの本，つまり台帳の男は学生側からわざわざ会社名を聞き出させておいて，自分が「社長で，株の名義書換代理人だ」(55) と答え，株に興味がないなら用はないとばかり，わざとすげなくあしらうことで，学生の関心を高めようとする。

学生は男に，自分は「注意深い人間だ」，「外観には騙されない」などと言って自尊心を覗かせるが，結局，まんまと台帳の男の罠にかかり，その株を購入するに至る。男は学生からさらに他の株の儲け話はないかと尋ねられ，「ミネソタ州北部」(58) の「ミシシッピ川河畔にある」「もともと逃亡モルモン教徒の拓いた」，「新しい，繁栄している」「ニュー・エルサレム」の不動産の話をするが，学生は興味はないと言って，二人は分かれてゆく。

作品には何も記されていないが，大農場の息子である学生の言う「余り」(57) の手持ち金はそれなりの額であろう，購入額に台帳の男がほくそ笑んだのは想像に難くない。

第10章に入り，台帳の男は大勢の乗客のいる客室に降りてゆき，トランプなどに興じる客を見回したあと，「温かな信用と信頼の気持ちに乏しい」(60) 現代人を諭した頌歌[19] が刷られたビラを読んでいる小柄の痩せた男と会話する。そして，あちこちぶらつき回って気楽に雑談して疲れた台帳の男は，人が着座している長椅子を見て腰掛け，眼前の4人がトランプゲームに興じる場面に目がゆく。腰を降ろした隣の人物は，たまたまあの脚の不自由な物乞いの黒人に金を恵んだ例の優しい商人ロバーツ ── 第3章，4章に登場 ── だった。

こうした語り手の語りからすると，台帳の男に扮した詐欺師は，もちろんすでに詐欺の種を蒔いておいた対象の商人が主たるターゲットであろうが，この客室に商人がいることを知っていて降りてきたという記述は見当たらないので，彼だけを詐欺の次の対象に定めていたわけではなく，気付いたらたまたま側にいたということだろう。

商人の方は新しいこの隣人を観察したあと，眼前でトランプのゲームに興じている4人のうちの2人について，頌歌のビラで口を覆い隠しながら潜めた声で，この台帳の男に「顔つき」(46) が気にくわないが，「詐欺師じゃないですかね」と

語りかける。すると台帳の男から，「あら探しするような心がけはよくない」，「手にしているその頌歌を読んでもあなたにはほとんど効果がなかったのですな」とたしなめられてしまう。

この頌歌はすでに触れたように〈人を温かく信用，信頼せよ〉と説教した内容であり，台帳の男も物語の冒頭に登場した聾唖の白人の乗客に掲げた石版の説教の内容とまったく同じで，これからカモにしようと狙いを定めた商人に自分を信じさせようとする台帳の男の一助となっている。

男は職員に扮していた時に商人に吹き込んでおいた会社の株の偽りの（内部）情報が商人の頭にあることを利用し，持っていた台帳が見れるようにと，二人の間の空席に会社名がある側を上にして置いてから突然立ち上がり，席を離れる。商人がうまく罠にはまって台帳をのぞき見し終えたあと戻って来て，すぐさま台帳を手にして急ぎ早に去ろうとするときに，商人は男に「例の石炭会社関係の方ですか」(63) と尋ねて彼を引き留める。「あなたの会社のかなり魅惑的な情報を耳にしているのですが」と言って，株の情報を教えてくれた喪章の男リングマンの名前を出した商人に，男はそんな人物は知らないと言ってわざと素っ気なく対応し，「失礼ですが，行かなければならないので」と言って去ろうとする。商人は止めようと，例の株の話を持ち出そうとする。すると男は，「この台帳は偽物かも知れませんよ，わたしはあなたにとって初めての人なのに，どうして信用できるのですか」(64) と尋ねる。先ほどの聖書を読んでいた女性への強引な問いかけとは逆の方法での誘導の言である。

株のガセネタが頭にある商人は男を信じると答え，台帳も「その標題が本物だと信ずれば」，なぜわざわざ「調べる必要がありましょうか」と言って，しきりに相手に信用していることを訴える。男は「そうした方がいいですよ。疑念が湧くかも知れませんからね」と念を押すと，商人はその必要はないと言う。というのも，調べてみても現在と変わらない，「もしそれが本物なら，そのようにすでに思っているし，本物でないとしても，本物を一度も見たことはなく，本来はどのようなものかもわからないのだから」などと訳の分からないことを言って，とにかく台帳が本物だと盲信しようとする。

詐欺師はガセネタに基づいた株の売買による儲け話に踊らされた商人のこうした態度をせせら笑っているわけだが，詐欺師の背後には彼を操る作者メルヴィルの，この商人の言動に代表されるように，黒人への世間体を気にしただけの博愛精神 ── 例の物乞いの黒人に「信用する」(25) と言い，「50 セント」を与えることで示した ── というのは持ち合わせていても，結局，根底では金銭欲に支配され，衝き動かされる同時代人を見つめる冷ややかな眼を感じざるを得ない。男は，「あなたの理屈は批判しないが，その信頼には感服します」(64) などと言って褒めあげ，「向こうのテーブルで」商談しましょうと言って商人に自社株を売りつけて当初の目的を果たし，金 ── それも大金であろう ── を手中に収める。

一方，うまく株を手に入れ売却して儲けられるなとほくそ笑む商人は，機嫌よく台帳の男と親しげに話を続ける。ここで物語は第 11 章に入ってゆく。

商人は，「この船の他の場所でどのようなことが明らかになるのか正しく予測するのはできない」と憂いに沈むように言いながら，その例として，移民用客室で目撃した，病で板に横たわる，生と金銭にしがみついて何も信用していない「老守銭奴」(65) を取り上げて，話し出す。

この場面での商人の心情は，ひとまず大金を手

に入れたつもりになって大いに安堵し，落ち着きを取り戻してもとのように周囲を見回せる状態に，以前に物乞いの黒人に小銭を恵んだ時のような博愛的精神が働き出せる状態に戻ったといったところなのだろう。それゆえ，黒人に対するのと同様の意識を移民用客室の床に伏せる老人に向けられたのだろう。結局，二人はこの老守銭奴に関しては意見の一致を見ないと分かると，例の脚の不自由な物乞いの黒人の場合に話を転じる。

商人は，黒人は「奇妙なほど陽気」(66) で，たとえ不運にも体が不自由になっても，陽気な人生観を捨て去ることはありそうもない，などと発言する。そして次に商人は第三番目のケースとして，既出の寡婦・孤児救護院の職員が喪章の男から直接聞いたという，喪章の男の妻（Goneril）の話を持ち出す[20]。

喪章の男と職員が同一人物であることを知る読者にとっては，この話が喪章の男の口から直接聞いた職員を通して商人が聞いた話だということは，取りも直さず一人の詐欺師から商人が得た話ということになる。商人の語るその話の聞き手は，なんと喪章の男の姿でこの話を最初に語った，詐欺師本人というわけだ。

4

そして語り手は，商人自身の言葉だとたぶん必要以上に良く評価することがあるので，何ら他意はないが，あえて商人のでない言葉で語ろうと前置きをして，次の 12 章で聞いた話を語り出す。

喪章の男の娶ったゴーネリアという名の妻は，痩せ形の女で，いくつかの奇癖の持ち主だった。中でも最たるものは，妻は若い男性がいるとその手か腕に触れずにはいられないというものだった。夫は時を選んで穏やかに妻にその奇癖を控えるように注意したが，妻はまるで聞き入れなかった。二人の間には 7 歳の娘がいたが，「様々なことがあったあと，妻は悪質な嫉妬に駆られ」(68)，その対象をこの娘に定め，巧妙に虐めるようになる。娘への悪影響を恐れた夫は，ついに彼女との離婚を決意し，娘を連れて別居するに至る。すると，彼女のことをそれほどよく思っていなかった近隣の女たちも彼女に同情し，原因を特定することなく彼女から娘を奪って出て行った夫に対して憤りだすが，夫の方は「これに対して自尊心からゴーネリアへのクリスチャンの慈愛で長い間口をつぐんでいた」(69) が，「絶望に追い込まれ，この事件の真相を多少匂わすが，誰ひとりとして信じようとせず，ゴーネリアの方は夫の言うことは意地悪い作り話だと断言した」。やがて彼女は，女権拡張運動家に薦められて訴訟を起こし，その結果，喪章の男は敗訴して娘も財産も失い，信用もがた落ちとなる。

事態を挽回すべく仕方なく彼は妻の奇癖を明らかにし，「精神錯乱の告発」をすることにしたが，逆に自分が狂人であるとして「永久的に拘束しようというゴネリルの意図を嗅ぎつけ」，「彼は逃亡し，いまは罪なきのけ者となってミシシッピ川の大渓谷をひとり流浪していたが，ゴーネリアを失ったことで喪章を付けていた。それは最近新聞で彼女の死を知り，こうした場合の所定の形で哀悼の意を表すのが相応しいと考えたからだった。この数日間，彼は娘の許へ戻る旅費を稼ごうと努め，いまはまだ不十分な資金で歩み進み始めたのだった」。

以上が，喪章の男リングマンがセミノール族の「寡婦・孤児救護院」の灰色のコートの職員に語った自分の身の上話を，商人ロバーツがこの職員から聞いて語った話の語り手版の概要だが，喪章の男と職員が同一人物の詐欺師であることを知る読

者が，この喪章の男の身の上話は詐欺師の作り話であろうと勘ぐるのは当然である。読者からすれば，この身の上話が本当だとすれば，喪章の男は娘に会いに行く旅費や後の娘との生活費を詐欺によって稼ごうと目論み，これを船上で実行に移したのだと解することになるが，詐欺師のカモである商人に当の詐欺師が本当のことを言うとは到底考えられない。とすれば，この挿話に何の意味があるのか，作品全体から見てメルヴィルが作中にこの挿話を配した意図がどこにあるのか，本稿の筆者には，残念ながら依然として答えを見出せないままである[21]。語り手が話を語り終えたあと，章末で「この善良な商人はいまこれらすべてを最初から，その不幸な男にとってかなり辛いことだったと考えざるを得なかった」と結んでいるが，この文意も単に商人の善良さを，それも詐欺師に利用される善良さを強調しているだけに響く。

次の第 13 章は，語り手の語るあるアメリカ人の挿話で始まる。

内容は，アメリカ人の真面目な学者がロンドンの夜会で，折り返し襟に滑稽なリボンを付け，小癪な軽口ばかりたたき，素早く動き回って多くの人々から賞賛を勝ち取っていた気取り屋に出会う。この学者の彼に対する軽蔑たるや大きかったが，まもなく街角でその気取り屋の男と出会って話をし，小癪な人物の思いもかけない良識を知り，後に友人から彼が自分とほとんど変わらない大家で，他ならぬ炭鉱用安全灯の発明者ハンフリー・デーヴィーだと知らされて面食らったという話である。

そして語り手は，前章の第 12 章で商人の語った喪章の男の話を聞く台帳の男は，そんな挿話に出てくる気取り屋に相当し，「哲学的で博愛主義的な話の出来る人物」だと述べている。

こうした語り手の前置きのあと，商人が語る喪章の男の「話に多少は感動した」（70）という台帳の男の感想が語られる。そして，台帳の男は商人に，「喪章の男が本当だとする災禍にどう耐えたのか，落胆したか，それとも人への信頼を失わなかったか」と尋ねる。これに対して商人は，喪章の男は災禍を「甘受した」，それも「他の模範となるぐらいに」と応え，語り手はこの商人の様子を，「人間の善良さと当然の報いに対して片寄った省察を控えたばかりか，彼には抑制された信頼と，時たま適度の快活さが見られすらした」と語る[22]。

すると台帳の男は商人に，「不幸な男の言う体験は，（中略）敬虔さばかりか公正さも大いに高め」，「興奮時でも道を踏み外れて人間嫌い［厭世家］になることはなかったのだ」（71）と言った。台帳の男は，「そういった人の場合，その体験は結局，慈しみ深い完全なる逆転によって作用し，決して人間への信頼が揺るぐことなく，信頼を確かにし，不動にしたことを疑わなかった」のだと説明し，喪章の男を褒める。台帳の男はさらに続けて，ただ，「彼女は長所を持ち合わせた短所のある妻で，その欠点が表に出たときに女性に対する十分な理解がない夫が，かなり説得力のある何か別な手立てでなく理屈で説き伏せようとし，それで納得させ改心させることに失敗したのだ。彼女から退いてしまったのはそういう事情なので，唐突だと思われた。簡単に言えば，おそらく双方の側に，大きな徳目では均衡が保てないような小さな過ちがあったのだろうが，結論を急いで下すべきではなかろう」と，喪章の男にも欠点があったことを指摘する。

台帳の男のこうした「穏やかで偏らない見方」にもかかわらず商人が心から再度喪章の男の場合を嘆くので，台帳の男は「それは駄目だ」，「例外的な場合でも，不当な災禍の存在を認めることは，特に邪悪な者の阻まれることのない手管でもたら

されたと申し立てられた場合は，控えめに言っても，賢明ではない。というのも人によっては，その存在によってもっとも重要な説得に対して好ましくなく偏見を抱かせることがあるかも知れないからだ」。「仮に神の摂理に対する確信が，例えば，日常的な出来事のような変動に多少とも左右されるならば，その確信の程度は，考える心には，長期にわたる不確かな交戦期の株式取引に類した変動の影響を受けてしまおう。その確信は体験以上に本能に基づいており」，変動「の影響を一切受けないことが，人間性に対する正しい確信の場合のように，その神性に対する正しい確信の要諦なのだ」(72) と述べて，商人を説得しようとする。

そして，「商人が心からこの意見に一致したとき（信仰深いばかりか分別のある人物としてそうせずにはいられなかったのだが)，この話し相手［＝台帳の男］はこのような話題に対する不信の時代に，それにもかかわらずかくも健全で崇高な信頼をほぼ完全に分かち合える人物と会えて満足だ」と商人に表明する。

さらに台帳の男は，「分かっていない人々に口実を与えないように理論を立てるべきだ。というのも，その［＝喪章の男の］ような事例にでも不可解な点があると認めると，彼らにその問題に対して暗に降伏したと捉えられるかも知れないからだ。時おり一時的に許されている，悪人の善人に対する優勢の見掛けの横行に関しては，将来の応報論を現在無事である事の正当性の裏付けとしてあまり論戦的に強調しすぎることは，あまりに思慮がなさすぎるかも知れない。というのも，実際のところ，まともな人々にはこの論は真実であり，十分な慰めなのだが，つむじ曲がりには，論戦的にこの論に言及すると，やんちゃな奇想だが，そのような論は摂理が働くのは今ではなく，将来であることを肯定する論と同じことなので，浅薄な人々を刺激するだけかも知れない」，「正しい眼で見る人は誰でも信頼という堅牢なマラコフ砦にへばり付いて，理性という広々とした大地での危険な小競り合いに駆られないようにするのが最善だ」と続け，「善人は，話題によっては，何よりも自分の本性の感情的素直さからほどわが身を守らなければならないものはないのだ。なぜなら，その本性はいくつかの点でそうだと思われるものではないことを，人はきちんと注意を与えられてきたからだ」(73) と結ぶ。

ここで商人は自分の心持ちを伝え，台帳の男の話を気に入って聞いており，「元気を取り戻せて嬉しい」，「説教壇の下で座って聞いている」ようだと語っている。

すでに狙いの金銭は手中に収めているこの時点ではもう詐欺師本の男に商人から金銭を巻き上げるための工作は不必要であることを考えると，ここでは詐欺師が地のままの本来の自分となって商人と会話している可能性も考えられる。愛を説く最初の聾唖者の白人がこの詐欺師だとすれば，人への信頼を失わないでいるよう説く，つまり愛を説く台帳の男の同じ姿勢が詐欺のための見せかけ［方便］であろうと，あるいは純粋な信仰心からであろうと，語る内容それ自体は同時代人の読者への愛の説教となり，それなりの意味を持つことになろう。

このように考えれば，商人にとっての新たな「説教師」としてではなく，「同等の気の置けない仲間」として商人に受け入れられて，会話を楽しんでいる風景も腑に落ちよう。

台帳の男は，「心配していたような，無味乾燥な話をしているのではないことを知って嬉しい，説教師などと堅苦しく考えず，同等で付き合いの良い仲間として受け入れてほしい」と言って，いっそう愛想よくして再び商人に対す。そして，仕舞

いには「ゴーネリアはゴーネリアであり，死別によってついに本質的にも法的にも彼女から逃れることが出来たのはなんと幸運なことか」，「お祝いを言いたい」と商人に言い出し，先ほど「おそらく双方の側に，大きな徳目では均衡が保てないような小さな過ちがあったのだろう」（71）と述べた大局的な立場を離れてしまったかのようである。

台帳の男の主張に対して商人は，「そう［＝幸せ］であることを心から願っている，いずれにしてもこの不幸な男がこの世で幸せでないとしても，あの世では，少なくとも幸せだろう」（73）と言い聞かせて，「自らを慰めようと最善を尽くした」のである。すると台帳の男は，「この世でもあの世でも不幸な男の幸せに疑いをまったく挟まず，シャンペンを注文して，かの不幸な男に対して喜ばしい考え以外のことを連想したとしても，少量のシャンペンはすぐさま泡立ってしまうことをおどけた口実に，商人もこれに与ることを促」したので，二人は黙ったまま考えごとをしながら，間隔を置いてゆっくりと何杯か飲み干す。

酒が回った商人は，「ああっ，ワインも信頼もよいものだが，」両方とも「染み透って」，「真実」を「温め，赤らめて」「慰めることはできず」，「夢も理想も手の中で弾き飛び，あとには焼け付けるようなものしか残らない」と，ついに本音を吐露するに至る。

それを聞いた台帳の男は，「不信，根深い不信が」（74）「わたしに告白した素晴らしい信頼」の「下に横たわって」おり，「一万倍になって」「いま突然顔を出した」，さらに「ワインは心を喜ばせるもので，悲しませるものではない。信頼を高めるためで，弱めるためのものではない」と言って，これ以上商人にワインを飲むことを止めさせようとする。

「このからかいで，つまり，このような状況ではもっともきわめて効果的な非難で酔いが覚め，赤面し，ほとんど当惑すらした商人は，周囲を見据え，表情を変えて口ごもりながら，自分の口から出た言葉に相手に劣らないぐらいびっくりしたと告白した。」「なぜそんな熱狂的発言が口から飛び出したのか」分からず，「頭は何ともなく思われ，実際，どちらかと言えば」，ワインは「頭を澄ませ，明るくさせた」と言う。

台帳の男は商人の発言を否定的に，「と言うより，ストーブの光沢で ── 黒い部分がひどく輝いたのでしょう。シャンペンがよくなかった，大丈夫ですか，信頼は取り戻せましたか」と言う。すると商人はまた本の男の言に従って「信頼を回復させられたように思う」と答えると，「長話をしたようだ」と言って，いとまごいをする。

立ち去るさいの商人の様子は，自らの誠実な善良さに唆されて，あるがままの心の奇妙で不可解な移り気で，つい無分別な打ち明け話を自らにも他者にもしてしまったことを悔いている人物のものだった。

第 14 章は，前章の主要な登場人物である商人を出汁に，メルヴィル自身が語り手を通して語る，作家の描く登場人物性格論となっている。

この章はこれまでのメルヴィルの作品で繰り返し見られる，物語の本筋から横道に逸れた閑話休題的な章のひとつで，しかも内容的に，酒で酔った勢いで善人から変貌してその本性を露わにしたかのような商人を描いた直後の作者メルヴィルの，作家の描く登場人物の矛盾について述べた自己弁護的な章である。途中人間の性格論で中断するものの，昔も今も人間性に変わりはなく，あるのは表現の仕方が変わるだけ（77），と語り手の口を借りて述べている[23]。

次の第 15 章で物語は再開する。

商人から船中のいろいろな人の話を聞き，下甲

板の老守銭奴の話に飛びついた台帳の男姿の詐欺師は船倉に降り，この守銭奴に株価の上昇による元金を「3倍」(81) にする儲け話をしてだまし，株の投資金10ドル金貨10枚をまんまと巻き上げて，預り証を求める老人を振り切るかのように姿を消す (82)。

なお，投資を説得する際に，咳き込んで体調の良くない老人に，知り合いの「薬草医」の薬はきっと効くだろうと告げている。この「薬草医」が，第2章で登場する詐欺師である「足の不自由な」黒人が自分の保証人として挙げた，乗船中の知り合い8名の人物のうち，すでに登場した「喪章を付けた紳士」,「灰色のコートを着て白いネクタイをした紳士」,「大きな本を持った紳士」に続く，第4番目の人物である。

5

第16章で，1850年代半ば —— すでに触れたように，この作品の執筆時の1856年ごろ —— のある4月1日の夜明け前に始まったこの物語がやっと夜明けを迎え，天空は青空となって，周囲の風景が朝日に照らされる。舞台は，「体にぴったりした黄褐色の外套」を着た，前章で台帳の男が知り合いだと言っていた薬草医（第20章まで）が，太陽の恩恵をひとり受けないかのような体の弱い「病人」の隣で腰掛けに座り，話し込んでいる場面で始まっている。老守銭奴とは別人である。

薬草医に扮した詐欺師はここでも，言葉で体が治せるものか，目の前から去れといわれながらも辛抱強く〈薬が効くも効かぬも，本人の信じる気持ち次第〉と説得してこの病人の信頼を得，速効は期待するなと弁じつつ，自然界の物質を自ら調合して作ったという「総合鎮痛回復剤」(85) の入った薬瓶を買わせ，売上金3ドルを手にすることに成功する。別れ際に，薬局でも手に入れられるが，偽物の見分け方まで教える念の入った忠告をしてその場を去る。

第17章では，薬草師は「客室の控室のような間」(90) に行き，そこで鎮静剤を売ろうと「外観の立派な人々」に声をかけるが無視されてしまう。やがて船は次の船着場に到着し，体が不自由らしい巨体の男が，クレオールかコマンチ族が母親らしきモカシンを履いた発育の悪い娘を連れて，乗船する。薬草医は娘に手を差し延べて乗船を手伝おうとするが，娘は反応しない。薬草医は客の面前で薬の宣伝をする。一人が薬を買うと，他の客も興味を引くようになる。大勢の中から薬草医の話に耳を傾ける者も出てき，客の間を進んでゆくと例の巨人が効能はあるかと尋ねる。薬草医が，効いたという服用者の記した「証拠書類」(94) を読み上げると，突然，彼に殴打されてしまう。周囲の乗客は依然と無関心のままだが，薬草医はそれにかまわず効能を訴え続けていたが，急に，誰かに呼ばれたかのように，他所に移る。

次の第18章は，姿を消した薬草医を観察していた乗客の紳士二人による薬草医の正体をあれこれ論じ合う場面が紹介される。

そして，そこへ再び姿を現した薬草医は，乗客に思いもかけない呼びかけをする。セミノール族の寡婦と孤児の救護院の職員はいるか，あるいは他の慈善団体の者はいるか，いれば薬の「売上の半分を慈善行為として即座に寄付する」(96) —— この場合は2ドル —— が，と叫ぶのである。乗客から返事がなく，薬草医は今度は，「これまでこれ以上のことをしていると憶することなく思える人で，いま困っている人」(97) なら誰でもいい，「男でも女でもいないか」と問う。そして，最後に顔に傷を負った男がこれに応ずると，彼に金を手渡して去ってゆく。

その後，先ほどの紳士二人は再び薬草医の正体について言葉を交わし，一方が詐欺師で「売上の半分を慈善に捧げる詐欺とは……愚か者だ」と言うと，相手は「その愚行は殻破りだな。天才かな。ヒビの入った頭で，こんな時代じゃあ，それほど殻破りってほどでもないか」と返し，一方はまた，「詐欺師で愚者でしかも天才ってなわけにならないか」と述べる。そこへ，別な男が加わり，薬草師が「国中を徘徊している例のイエスズ会の使者のひとり」（98）ではないか，「よりよく秘密の企みを成し遂げるために，時々この上ない奇妙な仮面をつけるそうだ」と発言し，この三人の乗客の間で姿を消した薬草医の正体を論じ合う。ちなみに，この「使者」の徘徊の目的は「旧教の宣教」[24]である。

第 19 章は，そんな乗客間の「議論があったことなど露知らずにいる」薬草医と，「足の麻痺した」（99）松葉杖をついたこの章題となっている「運命の兵士」との会話から始まっている。

薬草医はその相手から，この連隊服をまとった足の不自由な兵士姿の男は，ある殺人事件の現場に居合わせたために証人として拘束され，他の証人は被告ともども保釈されるが，周囲に自分の身を保証してくれる人物のいない彼ひとりが裁判が始まるまで「じめじめした監房」に抑留され，裁判期間中もその劣悪な環境下で拘留させられ続けたせいで足が萎えてしまい，裁判後に放免されたものの，そのような体では仕事に就けずに仕方なく連隊服をまとって「メキシコ」戦争の傷病兵と称し，物乞いをして暮らしていたという来歴を知る。

同情した薬草医は，世を拗ね不信に陥って希望を失っているこの物乞いに人への信頼を説き，男に近づいた「もともとの目的」（105）が足の具合を診ることだったと伝える。

診察後，薬草師は「例の黒人」── 第 3 章に登場するこれも足が不自由な物乞いだった ── のことに触れて，「彼に薬を処方した，きっと彼も間もなく自分と同じぐらいちゃんと歩けるようになるだろう」などと嘘をつき，別れ際に足に効くからと言って「塗剤」の箱をタダで渡す。

すると人への信頼回復を勧められ，さらに薬の無償提供を申し出られ，大いに心を動かされた男は，「確かにこの薬は効くのか」と問い，薬草医から「たぶんね，たぶん。試しても害はないから」と返答される。すると，薬草医の善意にほだされ薬の効能を信じる気になった男はさらに 3 箱購入すると言いだし，代金は払う，「断るな」（106）と言って，なんと薬草医への祝福の言葉とともに手渡す。

結局，薬草師の姿に扮した詐欺師は，無償行為を出汁に，額は 1.5 ドルと少額にせよ，相手を騙して金銭を稼いだことになる。

さらに次の第 20 章で移動した詐欺師は，前章の話の現場からそれほど離れていない船内で，「正気を失った者のようによろよろと歩きまわる」咳で苦しむ老人と出くわす。この老人は第 15 章で自分に株を売って代金を渡されたにも関わらず，何ら受領書も渡さず姿を消してしまった台帳の男を探していた，例の守銭奴である ── 本稿第 4 章末尾で登場 ──。薬草医に台帳の男「と会って以来，頭がぐるぐる回り」（107），「どうしたものか，やつを信用してから自分の五感がまったく信じられない」と訴える。薬草医は台帳の男は「自分にすぐに百ドルを多量の 10 ドル硬貨に変えてくれた」などと言って弁護する。それを聞いた老人に台帳の男の許へ連れて行ってくれと頼まれ，薬草医はその手を取って船内を探し歩き，二度，老人に台帳の男に似た男の姿を見かけたふりをして，人違いだったなどと言ったりする。

もちろん嘘なのだが，そうこうしているうちに船は船着場に到着し，下船する乗客の中に台帳の男がいたかのように駆け寄って，「トゥルーマンさん，トゥルーマンさん，ほらそこに ── あれが彼ですよ」(108) と老人の注意を喚起させ，姿を見届けようとする前に，舷側から突き出した「板が引っ込められてしまった ── 遅すぎた ── 出発してしまった」と残念がる。

詐欺師の薬草医がまた嘘をついていることを知る読者は，老婆心から再び老守銭奴が金銭を巻き上がられないかと心配してしまうが，結局，それが現実となる。

老人の様子を見て健康を気遣い，薬草医は彼を客室の寝所に連れ添ってゆく。その途中，激しく咳き込む老人に「何か試してみましたか」(109) と尋ねると，「もう試すのはうんざりだ」と答えるので，第 16 章で病人に勧めた例の「総合鎮痛回復剤を試してみたか」と問う。この薬の名前を台帳の男トゥルーマンから聞いていた老人は，では，「おまえが例の薬草師か」と確認する。薬草医はすかさず老人に薬を割り引いた値段で得だからと言って，一ダースで買わせることに成功する。そして，調子よく薬草師は，「もっと先まで付き添ってゆきたいが，まもなく上陸するので手荷物を見つけ出しにゆかねば」(111) と言い残して老人の許を去る。

もともと手荷物など携えていなかった薬草医は ── 売薬は着衣の「外套」から出していた ──，もちろん，これまでの詐欺の相手からできる限り早く退散してきたように，老人の許からもできるだけ早く離れたのである。

第 21 章は，老人との二人の「会話を聞いていたに違いない」，「アライグマの帽子をかぶり」，「二連銃」を担いだ猟師の恰好をしたミズーリ州の奥地の住人が登場する。このミズーリ人は薬草医が退場した直後に老人に近づき，「やつはあの薬物の入った酒であんたを欺したじゃないかね。薬草と自然で手の施しようのない咳を治せると思ってか」と迫る。薬草師を信頼し，希望を回復させ，薬草の，自然の治癒力を信じてようになった老人が「治してくれるさ」と答える。するとこの奥地人は，揺るがぬ信頼を示す老人に対し，「誰が咳をするようにしたのかね，自然じゃないのかね」，「コレラは誰の責任だ」，きわめて有害なベラドンナも薬草だろう，大草原で御者を凍死させるのは誰か，野生児を生み出すのは誰かと，続けさまに自然が人間に害悪をも与えている事実を指摘し，さらには，アラバマ州南西部の「モビール市」(112) の病院で，自分で治癒できずに病床に就く痩せた薬草医に対する医師の侮蔑を伝える見聞談まで披露する。

と，そこへ下船準備に鞄を取りに行って戻ってきた薬草医がこのミズーリ人と対峙する。

自然への信頼を勧める薬草医と彼の間で「信頼」と「不信」を巡る論争が展開されるが，その二人の議論の合間に時々口を出す老人の体調を気遣って，薬草医はひとまず老人を階下の客室へ連れて行き，再びこの奥地人と論争を始める。

薬草医のことを面と向かって「非常に怪しく，疑わしい男だ」と言っているこのミズーリ人は，言葉の端々から ── 例えば，彼のことを「キツネ」(116) と呼んでいるが，物語の第 1 章ですでに紹介されているように，この呼称は詐欺師を意味している ──，薬草医が詐欺師であることを見破っているかのようだ。

埒が明かないと思った薬草医は話題を変える。それは，ミズーリ人が「信頼」と「不信」を巡る論争の中で自分の使用していた少年と大人の男への不信を述べていた時に，機械を労働力として使用しようとしていることに触れたことを出汁に，

薬草医は「博愛主義的な良心のとがめから，奴隷を求めにニューオリンズくんだりまで行ったりできないのでしょうね」（117）と語りかける。すると，男は奴隷が嫌いなことを明言し，逆に「あんたは廃止論者か」と問う。そこで薬草医は，「もし廃止論者が熱狂者のことを指しているのなら，全く違いますな。しかし，もし人間であるが故に，奴隷を含みすべての人間のことを思いやり，合法的行為で何人の利益にも反せず，何人の敵意をも掻き立てず，人種に関係なく人類から進んで苦痛をなくしたいような者を意味しているのなら，私はあなたの言うような人間ですよ」と答える。しかし，男から「よく言葉を選んだ，賢明な意見だ。穏健な人物で，邪悪な者の貴重な下っ端だ」，「悪には役立つが，正義には役立たずだ」と，褒められつつも小者扱いされてしまう。さらに，「元気のない，我慢強い，譲歩しがち」で，「まさに奴隷の雰囲気」の漂う薬草医に，「おまえさんの主人は誰だ，あるいは，会社に雇われているのか」（118）と尋ねられた挙げ句，「奴隷制廃止論は，いやとんでもない，単に奴隷のために奴隷が抱く同情の発露に過ぎない」とまで批判される。

薬草医はこれに対し，「奥地はかなり奇抜な考えをはぐくむものだと思われますな」とやり返し，再び人間の代わりに「機械」を用いる考えを支持し，「うまくいきますように」と言って，接近するミシシッピ州に臨むケープ・ジラードー市の船着場で，下船するかのように別れを言って，姿を消す。

もちろん，実際は下船したふりをして薬草医の詐欺師は姿を変え，次の第22章で今度は職業紹介所の出張所の「代表を務める」（119）所員として，自所の略語を刻んだ真鍮を首から垂らした背広姿で登場し，先ほど別れたばかりの奥地人（のちに自分の名を「ピッチ」と紹介する）に近づく。そして奥地人から，今の船着場で下船する暗黄褐色の服の薬草医とすれ違わなかったかと聞かれ，所員はすれ違ったことを認め，「ちっと前に会ったことがあると思う。とても温和なクリスチャンタイプの人物のようだ」と答えて，自分の扮した薬草医がいかがわしい人間ではないような印象を与えておく。

奥地人は所員に「同類の薬草医に言ったように，わしは自分の仕事をこなすためにある種の機械を作ってもらおうとしているところ」で，機械は「無礼」も働かず，「忠実」で「私心もなく，賄いもいらず，賃金もない」（120）と言って，「少年であろうが男であろうが，大部分の労働には」，人は「損な」存在だと断言する。さらに彼は反論しようとする所員を制止し，所員が「薬草医とは不思議なほどぴったりのつがいとして，当然一緒だな」（121）とし，「巧言を弄するな。薬草医のやつもそうしようとした」と，詐欺師の肝が少しは縮むような批判を浴びせる。ただ，同一人物だと見破るほどの鋭さは持ち合わせていないようだ。

そして，奥地人は自分の名が「ピッチ（Pitch）」（122）── この語には，コールタールなどを蒸留した後に残る黒褐色の粘質物（「瀝青物質」）の意がある ── で，「自分の発言にこだわる」タイプだと自己紹介したあと，「15年間」で様々な人種の「35人の少年」を雇った経験から，その内の当初の見込み違いの最たる30人目の少年の，悪行を語る。そのあとも，自説に固執するこのピッチと所員の間で，中味の希薄な対話がしばらく続くので，読者にすれば作者が何のために長々と紙面を弄しているのか首を傾けさせられるところだ[25]。

だが，所員が悪童もやがて長じてその欠点が矯められてまともな大人になるという自説に従い，何もなかった乳幼児にやがて歯が，少年にあごひげが生える「喩え（analogy）」（125, 127, and

128）を用い，さらに悪童で鳴らした若者が長じて立派な聖職者や聖人となった人物の名を挙げて説得し始めるに至って初めて，作者の狙いが一つには，すぐにカモの対象となった他の登場人物と異なり，実用主義者で頑迷なピッチを易々と詐欺師に騙されない登場人物の別例として挙げることで ── すでに第 4, 6 章で登場した猜疑心の強い義足の白人が例に挙がってる ──，人は実際のところ容易には他人を信用しないという厳しい現実感を，物語に与えるためだったのかと解せる。

そして，所員がさらにピッチ自身がよく知る「聖アウグスティヌス」（130）の例を引き合いに出すと，ピッチはかたくなだった態度を「軟化」し始め，その心に多少とも所員への信頼が芽生えてくる。所員の詐欺師は，ここにきてやっと付け入る隙を見出すとすかさず，中には欠点のない少年もおりますが，あなたには健全な体と精神の子をご提供しましょうと言って，契約を結んで少年をひとり雇い入れるよう勧め，「前金 3 ドル」（133）の手数料と，金額は記されていないが少年の旅費をせしめることに成功する。この旅費の方はなんと，ピッチの方から所員に気遣って申し出てくれて，「多少気乗りしない様子ながらも」差し出された金だが，この申し出は，それほどピッチが労働力を欲しがっていたことの証左と言える。

所員は旅費への配慮に感謝を述べたあと，ピッチに「自分に完全で絶対的な信頼を置いていると言ってくれるか，戴いた紙幣をお返しするのを許していただけるか」と迫ると，「金はしまえ，しまっておけ」と所員を信頼する方の答えが返ってくる。すると所員は，さもあらんといった調子で「あらゆる商取引には信頼が不可欠なものですからね」と述べ，さらに新しい少年の成長を辛抱強く見守るようにと再度自説をピッチに説き，カイロ港の船着場が近づいてきたときに「カイロの宿屋の主人のために連れて行ったコックのところに立ち寄らねばならない」と，まもなく下船するかのように嘘の理由を言ってピッチの許を去る。

第 23 章は，停船し乗客が船着場から下り，新たな乗客が乗船したあと，船の手すりにもたれ船外を眺めながらピッチは，上陸したはずの所員のこと「を疑い始める」（134）。

「うまく取り入」（135）られ，「人間に対してきちんと適用する，不信の一般法則を放棄」させられてしまった所員の「愛想のよいお喋りの巧妙な一連の行為に思いを巡らせる」が，「なぜそうなったのか理解できな」かった。詐欺だとすればわずか数ドルを稼ぐためだとは思われず，「金銭のためというよりむしろ好きだからに違いない」などと考えたりする。

このピッチの瞑想の姿は，すでに第 5 章の冒頭場面で，やはり瞑想に耽っていた喪章の男の姿を思い起こさせられる。もっとも，喪章の男はピッチのような詐欺の対象ではなく，逆に詐欺師自身であり，喪章の男の瞑想の中味も紹介されていない点が全く異なるのだが。主役でもないピッチに詐欺師同様の姿態を取らせているのは，この男に作者が何かこれまでとは違う役割を与えているのではと勘ぐらせる扱いである。同じく詐欺の対象となった商人ロバーツの場合もそれなりに彼の心の動きの描写に紙面が割かれているが，この場面のピッチほどではない。

ほどなくして，あれこれ物思い ── 語り手はなぜかこの物思いは「心底からとは言えない」などと断っている ── に耽っているピッチは，パイプを握り「セラフのような甘美な声」の持ち主から「軽く肩を叩かれ」，「何をぼんやり考えているのですかな」と，声をかけられる。

このあと続く第 24 章は，「博愛主義者が厭世家を変えようと着手するが，相手をやり込めるまで

に至らない」という章の内容を要約した題が付けられている。ピッチに声をかけたのはこの博愛主義者であり，外観的にはピッチの熊とアライグマの毛皮をまとった奥地人の身なりと遜色ない，「鮮紅色」（114）を主とした格子縞の入った上着，ズック製の「白いズボン」と壮麗な紫色の粋なスモーキング帽という「珍しい」出で立ちで登場した例の詐欺師なのである。上述のように物思いに耽っているピッチに声を掛けたあと，彼に人への信頼を回復させ，人間嫌いをやめさせようと語りかけ続ける内容となっている。

語り手はこの新たな姿の詐欺師は「旅慣れた感じのよい最も代表的な人物」だと紹介しており，詐欺師自らはピッチに「世界主義者，心の広い人間（cosmopolitan, a catholic man）」（137）だと紹介している。国籍・民族などを超越し，全世界を一国と考えて行動する片寄りのない人間だと称しているのだろう。ピッチの肩に置いた手を用はないと再び払われ，「いったいおまえは何者なのだ」と問われた世界主義者は，「真の世界市民の指針は，それでもやはり悪に対して善で報いることです」（138），「わたしがどのようにお役に立てられるか言ってください」と答えるが，「去れ」と断られる。

世界主義者は，「人の姿が目にとまることが，ではとても嫌なのですね。ああっ，わたしとしてはあらゆる点において人が好きですよ」，ですから様々なところへ行って「ワイン」のように様々な人々を味わうのですと説明したあと，突然，ピッチに「あなたは独り暮らしをしているのではないか」と問う。もちろんピッチが独身なのは，所員と同一人物である詐欺師には既知の情報だ。

「どこか見抜かれたかのようにびくっとする」ピッチに，さらに世界主義者が「そう，独り暮らしをしていると気づかぬうちに奇癖が付くものだ――いまの独り言もね」と指摘すると，狼狽気味のピッチは「盗み聞きをしていたな」と問い詰める。そこで世界主義者は，彼が所員との会話の一部をつぶやいているのを耳にしたと，正直ぶって直前まで自分が変装していた所員に巧妙に言及することでうまく話の取っ掛かりをつかむ。所員のことは「分別のある人物で，自分の考え方と大いに似ている」（138）と評しておいて，「人は仲良くやってゆき，他人と同じようにするほうが身のためです。人生は仮装ピクニックで，人は役を演じ，配役を担い，愚者を賢明なやり方で演ずる用意がいつでもできていなければならないのだ」（139）と説く。

そして世界主義者はまだ納得のゆかぬピッチに，老婦とパイ売りの古いブーツを話題にした二つの話をして，「同意は得られなくても関心を示」（140）し，「明らかに心を動かされた」様子のピッチに「多少の人への敬意」があると感じ取り，「人への軽蔑を装うことでどんな矛盾に関わるか分からないのですか」，「孤独はやめることだ」と熱心に説く。

だが，ピッチの反応を見て，世界主義者は「わたしたちは話をし，話し続けているが依然として同じところにいる」（141）と進展しないと判断し，船内の散歩を提案する。

しかし，ピッチは提案には全く耳を貸さず，「おい」，「おまえは三番目のジェレミー・ディデュラーか」と問う。この騙り屋ジェレミーという呼称は，すでに第３章で足の不自由な物乞いの黒人が「ペテン」（24）師だという義足の白人からの指摘で，不審の念を抱き始めた他の乗客が用いた詐欺師への呼称だったことが想起されるが，詐欺師本人である世界主義者は何食わぬ顔でこの呼称を否定する。するとピッチはさらに，「どうしたものか今日はとてつもなく桁外れの訳の分からぬ

悪党に出くわすわい」(141) と語り，すでに遭遇した薬草医や所員のことに言及する。このことから，ピッチが最初の詐欺師は薬草医で，二番目が所員という認識をしていることがわかる。

世界主義者はやはり「誰のことです」ととぼけ，「あなたはわたしのことを誤解している。これからその誤りを正すために，ちょっとした議論に入って，そして」と話し合いを持ちかけようとするが，ピッチに拒絶される。だが，このあとも二人の間で口論は続く。

そして，人間嫌いのピッチに人を信頼し，人付き合いを避けぬよう助言し続ける博愛主義者の世界主義者が，「好漢」で「さらに良くなるにはただ振ればよいだけの良質ワイン」(143) だなどとおだてたピッチから，こともあろうに「言うならば ── 世界主義者になりすましたディオゲネスだ」(144) と言われたとき，人嫌いを博愛主義者に変えようと努力していた最中にその説得者自身がそもそも人嫌いなのではないかと被説得者から指摘されてしまう。

世界主義者はこれに憤慨し，「いかに不信があなたを欺いてきたことか。わたしがディオゲネスですと。わたしが人間不信を超えて人嫌いと言うよりむしろ嘲り屋だった彼だと。それなら死んで硬直している方がましだ」[26] と吐き捨ててついに説得をあきらめ，「当惑した」ピッチをその場に残し，離れてゆく。

6

次の第 25 章は，ピッチの許を去り始めた世界主義者が，一人の乗客に「西部のぶっきら棒な近づき方で」話かけられる場面から始まる。それまでの物語は，さまざまな姿に扮した詐欺師が乗客に一時なりとも言葉巧みに信用させ，隙を見せたところに付け入って額の多寡にかかわらず金銭を騙し取っていた場面の連続だったが，この章から攻守所を変えるかのように，新登場の乗客の方からのこの詐欺師への語りかけで話が始まっている。

以降，この世界主義者は最終章第 45 章まで後半の中心的人物として，次々と現れる新手の 5 人の登場人物と対話を重ねてゆくが，それまでの金銭を巻き上げる働きが中心の詐欺師は影を潜め，彼らの自己主張に対し一貫して人への「信頼」と，人の「良き友人」であることを説き続け，相手を信頼させる働きが中心の詐欺師に転じてゆく。まるで，第 1 章で現れた聾唖の白服姿の白人伝道師が再来して口を開いて声を発し，石版に記した「愛」の金言の博愛精神を宣べ伝えているかのようである。

さて，語りかけてきたこの西部人の乗客は世界主義者とピッチのやりとりを聞いており，ピッチの感想を「変わったアライグマだ。彼とは小競り合いをした」(144) が，「どことなくイリノイ州のジョン・モアドック大佐の話を思い起こさせるな」と，語り始める。

この新たな話し相手が，大佐は「蛇のごとくインディアンを憎んだ」人物だったと説明すると，インディアンのことを「原始的な民族の中でも最も優れ」ていると思っている世界主義者は，「インディアン嫌い」という「新たな造語を付された」この大佐がなぜインディアンを憎むのか興味を抱き，その由来を尋ねる。

すると，この乗客は，少年時代に実際に大佐本人をかすかに見る機会を得た体験に触れたあと，大佐の話は「何度も繰り返して父の友人であるジェイムズ・ホール判事から聞いた」(147) と断ってから，まず「インディアン嫌い」そのものを，次に「インディアン嫌いモアドック大佐」本人の話をし始めようとする。世界主義者も相手の話に傾

聴しようと，大いに意気込む。

次の第 26〜27 章は，この乗客の口を通して語られる，物語の第 3 番目の挿話となる大佐の話となっている。

この乗客がホール判事から聞いたこのジョン・モアドック大佐は，少年のときに一家で西部へ移住しようと移住予定地に赴くが，現地で待ち伏せていたインディアンの一隊に家族全員を殺戮されてしまう。少し遅れて現地入りを予定していたために家族で一人生き残った少年モアドック大佐は復讐を誓い，長じて移住民の助けを借りてこれを果たす。

ところが大佐は，その後も「インディアン嫌い」となってインディアン狩りを生涯続ける。イリノイ準州の知事に選出候補として推されたこともあるが，公職に就くとインディアン狩りに制約を受ける立場になるので，彼はこれを断念したのだった。彼のインディアンへの憎しみが強かったことを証明する話である。

この乗客は判事から聞いた大佐の話を終えると世界主義者に向かって，「あんたのアライグマ［＝ピッチ］は，判事がここにいたら，広い意味での大佐のような人物だ，あまりに熱情をまき散らしすぎて熱情が薄まってしまったね，と断言するだろう」（161）と語る。熱情という点で，インディアン狩りを続けようと執念に凝り固まっていた大佐に比すれば足下にも及ばないピッチだが，結局，この乗客の言葉は，大佐と同類の頑固一徹のピッチに熱心に人への信頼の重要性を説いた世界主義者の行為は徒労に過ぎないという，間接的な批判となっている。

次の第 28 章でも二人の対話は続く。

世界主義者はこの乗客のピッチ評に対して，「愛がなければ正しい判断は不可能だ。人を判断するとき，愛は慈悲の賜物というよりも，人が誤りを免れないことに対する認識のわずかな開きを許容することなのだ」（161）と説く。ピッチは「不気味な殻に包まれたおいしそうなカキ」（162）のようなもので，「自身の人の良さを恥いっていて」，物語に登場する変わった老いたおじが甥に「年がら年中辛く当たっているが，とても愛している」ように，「人を遇している」と評価する。

するとこの乗客は，自分はピッチ「と交わした言葉はほんのわずかでしかなかった」と応じ，これまでのピッチ観を放棄する。世界主義者はこれに乗じてモアドック少佐の物語も「驚きというより信じ難」く，「つじつまが合わないところがある」と述べ，「人嫌い」が「人類愛の人でもあり得ようか」，少佐は「人間嫌いでしか」ない，「人間嫌いは……異端だ」という理由で，「放棄してくれたら嬉しいのだが」と願う。

さらに世界主義者は，「人間嫌いは宗教の不信心と同根から発しており」，「背信と対をなすものだ」，「宇宙に愛の支配的原理が見えなかったり，見ようとしない者が無神論者でなかったら，無神論者とは何だ，そして，人間嫌いが人に親切さの支配的原理が見えなかったり，見ようとしない者が人間嫌いでなかったら，人間嫌いとは何なのか。分からぬか。いずれにせよ，その欠陥は信頼の欠如にある」と説く。

そして，この乗客の次に発した「人間嫌いはどのような感情なのでしょうね」という質問を巡ってお互い意見を交わしたあと，世界主義者が「人とは高貴な仲間であり，諷刺家全盛の時代にあって，人に信頼を置き勇敢に人を擁護する人を不快に思ったりしない」と発言すると，この乗客は「そうですね，僕はいつも人のことをよく言ってます。それに，いつでも人によいことができるよう心がけていますよ」と語る。すると世界主義者は，「きみは僕の望み通りの人物だね」と喜びを

語る。

この乗客が握手を求めると，世界主義者はこれに応えて手を伸ばし，新たな友となったいま「ここ西部の流儀」に倣って「ともに飲もう」，と提案する。今日は船上で多くの昔からの友人と会って，暗にすでに十分飲んでいると一旦は断るが，強い酒でなくワインなら大丈夫だろうと誘われ，結局承諾することになる。

第 29 章も二人の会話の場面で，小さなテーブルの席に着いてボーイに注文したワインを飲みながら，二人は対談する。

語りかけてきたこの乗客が，世界主義者と最初から気が合う仲であることを，「われわれのは最初の出会いで結ばれた友情ではないですかね」（165）と言うと，世界主義者も「一目惚れ」のような友情だと相槌を打ち，「唯一の本当で，高貴な友情だ。信頼を示すものだ」と付け加える。

そして，友人となった二人はここで初めてお互いに名乗り合う。乗客は「チャーリー・アーノルド・ノーブル」と己を紹介し，世界主義者も「フランク・グッドマン」だと名を披露する。

ウェイターがワインを持ってくると，チャーリーは世界主義者にボトルに張ってあるラベルの「P. W」の文字の意味を問う。「ポートワインを注文したのではないのか」と返すと，チャーリーは「ああそう，そうだ」と応え，世界主義者は「いくつかの少し不可解な点がそれほど難しくなく明らかになるものだ」と言う。しかし，この「ありふれた言葉はその耳に届かなったよう」で，チャーリーは「いいワインだ，いいワインだ。友情の特別な絆じゃないですか」（166）と語り，さらに最近のワインには混じりけの無いワインはないとか言う人間を非難する発言を続ける。

世界主義者の「いくつかの少し不可解な点」とは，一点は当然，ラベルの文字そのものの判読の可否，また一点は判読できなかったチャーリーの不可解さも含まれている可能性があると考えられる。世界主義者との対話を振り返ってみれば，酒を飲もうと声をかけたこの御仁チャーリーは，ピッチの話からワインの話に至るまで，相手の世界主義者の主張を結局は，ほとんど是認してきている。世界主義者がこうした事実に多少疑問があったとすれば，飲もうと声をかけたその本人のワインの知識の乏しさに対する疑いが加わって，抱いていた疑念がついこのような形で口をついて出たのではないか。

世に出回っているワインの質の低化へのチャーリーの言及を受けてしばらく考えた世界主義者は，近頃あまりにも多くの人がワインをどんな気持ちで見ているかというと，「最も信頼の欠如を示す最も耐え難い例の一つ」となっていると応える。ワイン販売業者に疑い持つ者は「人の心に限られた信頼しか置けない人たちだ」と，ここでも世界主義者は世の風潮としての人々の「信頼」のなさを嘆く。

彼はチャーリーとこのあと対話を重ねるが，まだ約束の自分への乾杯をしていないがと，チャーリーに催促をする。チャーリーはこれに応えて，乾杯をしてワインを少し飲む。世界主義者は喜んでこれを受け，ワインをたっぷり飲んでグラスをテーブルに置く。

世界主義者はさらに「ワインの真偽の疑わしい不純さ」（167）に話を戻す。世には「たいていのワインはまがい物だと確信していても，たとえまがい物でもまったくないよりましだというぐらいワインはよいものだと見なし，なおそれを飲み続ける者がいる」などと主張する妙な人がいるが，その者に「もし禁酒の人々があなたはこのままでは遅かれ早かれ健康を害しますよと力説しても」，本人は「そんなことを知らないとでも思っている

のか。しかし，元気づけもない健康なんてつまらない。それにまがい物の元気づけにもそれなりの値段があって，自分は進んで支払うよ」と反論する話を，「たとえ話」として紹介する。そしてさらに，このたとえ話を聞いて「突飛な」「教訓」を引き出した「奇っ怪な」人がいると語り，その教訓が紹介される。

それは，ワインのたとえ話は，「どうしようもないぐらいお人好しの気質の人が，大半の人は不誠実であると思っていても，間違った社会でさえまったくないよりましだというぐらい社会をすばらしいものだと見なし，なお親しげに人と付き合うさまをよく説明している」話であり，このお人好しに「もしロシュフコーのようなモラリストがこのままでは遅かれ早かれ安全が損なわれますよと力説しても」，本人は「そんなことを知らないとでも思っているのか。しかし，安全のない社会なんてつまらない。それにまがい物の社会にもそれなりの値があって，自分は進んで支払うよ」と反論するという内容の教訓だった。

これを聞いたチャーリーは「少しそわそわして幾分疑わしそうに相手を見ながら『とても変な理屈だ』」，「突然興奮して，ほとんど個人的に不当な扱いに憤慨したような表情を思わず浮かべながら『非常に誹謗的な考えだ』と叫」ぶ。

世界主義者は「ある意味では君がそう言うのも当然だ」と相槌を打ち，「その話にある一種の冗談のために，愛はおそらく多少の邪悪さを見逃すかもしれない。ユーモアは事実，ありがたいもので，人の精神のもっとも不道徳な行為においてすら，もし九つの面白い冗談が見いだされれば，賢者の中には数がソドムの全住民ぐらい多くても，その邪悪な考えのすべてを贖うことを認めるほど寛容になるぐらいであ」（168）り，「誰もが，他の事柄にはほとんど同意しないくせに，ユーモアを楽しむことには大体賛意を示すのだ」と語る。「ユーモアがある人は，大きな声で笑うことができる人は ── 他の点でどのように見えようが ── 冷酷な悪党であることはほとんど無いという言が諺に匹敵するとしても，不思議ではない」と付け足す。

するとチャーリーは，石屋が捨てたような大きなブーツを履いた，下の甲板の「青白い顔つきの貧しい少年」を指さして，大笑いする。ほんの少量のワインしか入っていないにもかかわらず酒酔いをした上ででもあるかのようなチャーリーの，この話し相手の言を無視したような態度に腹も立てず，自分の眼でもその少年の姿の「荒唐滑稽さ」を認めた世界主義者は，さらに話を進める。

「君の大笑いはわたしの言っていることを実演してくれてるね……。経験的に笑い上戸に悪人なしという諺が認められなくとも，自分は信じ無きゃならない気がするな，人々の間で通用しているからね。きっと元は彼らが言い出したもので，だから正しいに違いない。だって民の声は真実の声だからね。そう思わないかね」。

チャーリーがこれに「真実が民を通して語らなければ，真実が語ることは決してないって，聞いたことがありますよ」と応じると，世界主義者は「脇道に逸れているな。ユーモアに対する一般の考えは心の指針と見なされているけれど」と話を再び元に戻す。そして，アリストテレスによれば「歴史上一番愛されなかった人物は，ユーモアに対して嫌っていたばかりか憎悪をさえ抱いていたように思われる」し，古代シシリーの「気まぐれな暴君」（169）パラリス[27]などは，「単に高笑いしたという理由だけで踏み台の上で斬首させた」という逸話を紹介する。

そこで船上で爆竹が鳴るが，世界主義者はまがい物でも承知の上でなおワインを飲み続けるとい

う少し前に触れた人物を再び取り上げ，それは「確かに邪な考えだがユーモアを旨とした例であり，邪悪さを旨とした邪な考えの例を紹介しよう。その二つを比べ答えてくれないか，前の場合では含まれるユーモアで毒棘が中和させられないかどうか，そして後の場合ではユーモアの欠如で実際，毒棘が自由に振る舞っているかどうかをね」と問う。そして，ある才人から聞いたという話を挙げる。それは，「禁酒運動について，個人的な利益からして，けちん坊と悪党ほど素早くそれに加わる者はいない」，その理由は「前者はそれで金を蓄え，後者は金儲けをするからだ」というものだった。

この例に対してチャーリーが「邪な考えだ」，「非常に中傷的な考えだ」と声を張り上げると，世界主義者は相手の理解を確認するかのように「君はその邪な考えの毒棘に気付いているのか」，「ユーモアはまったくないかね」と問い，「まったくないね」という彼の回答を得ると「それならよろしい」と言って，「君は気ままに飲んではいないね」とワインを勧める。

実際ほとんど飲んでいるようには見えないチャーリーは，グラスをつかむがただもてあそぶだけで，世界主義者の勧めをかわすかのように話題を先日見つけたという「新聞への賛辞」（170）に変える。すると相手の世界主義者は「新聞を賞賛するものはどんなものでも聞いてみたい」，「最近，場所によっては新聞を蔑む傾向が認められるからね」と言って，関心を示す。

自分の投じた話題が思わぬ方向へ向かって戸惑うチャーリーは，新聞を非難する人々がいることに驚き，相手にその根拠を問う。

これに対して世界主義者は，彼らに根拠はないが「主張なら多くある」と答え，その一つとして，「王朝による専制政治下では新聞は人々にとって即興詩人ほどでしかなかったが，人民によるその下では反乱者ジャック・ケイドになりがちだ」という主張を紹介し，解説を施す。「要するにそういった気難しい賢者たちは新聞を，たまたま手中に収めた人物の大義のみに忠誠を誓うコルト式回転銃の観点から見ている。……『報道の自由』という言葉をコルト式回転銃の自由使用権と同列に考えているわけ」で，「十分痛ましい見方だと思うだろう」（171）と。

世界主義者はこの直後，新聞は「知識を増やすばかりか正義を高め」，「誤解に対する真実の最終的勝利を信ずる擁護者だと思っている。迷信に対する形而上学の，誤った考えに対する立証された理論の，自然に対する機械の，悪人に対する善人の最終的勝利をね」と述べてその新聞観を披露したあと，チャーリーに新聞への賛辞を早く教えるよう促す。

第30章で，チャーリーはその賛辞を紹介する。ワインを搾り取る圧搾機と新聞がともに「プレス（press）」（172）であるのを利用した言葉遊びによる両者の賛美の辞だった。それを聞いた世界主義者は期待外れだったものの，再びワインを飲むよう促す。

チャーリーはまたちびりと飲むだけで，逆に世界主義者にも飲むよう勧めるパターンが再び繰り返されるが，チャーリーは葉巻を吸おうと，ウエイターに持ってこさせる。

ここでも，葉巻をそれほど吸おうとしないチャーリーと世界主義者の間で吸うことを進める応答があり，チャーリーは「気のおもむくままに気さくな他愛のない話をしている間に」，ピッチのことを「思い起こした」（174），「彼がいまここにいれば，同類と打ち解けて飲まないために本当の楽しみをどれだけ我慢することになるのか分かるのになぁ」とまたもや話題を変える。

チャーリーはここでピッチとのちょっとした話し合いで，彼の口から漏れた個人情報を披露する。ピッチは「生まれはミズーリ州ではなく，何年か前にこの西部にやって来た，アレゲーニー山脈の向こう側の若き人嫌いで，財を成すというより人から逃げるためだった」（175）というのである。さらにチャーリーは，ピッチに「痛ましい偏見」があるのは，『ハムレット』の新王となったハムレットの叔父の戴冠式に参列後，フランスに戻ろうとする息子レアーティーズに対する父親ポロニウス「の助言を，ピッチが少年時代に読んだ時の嫌悪がもと」[28] である可能性を述べ，その助言は「それが吹き込む身勝手さにおいては，時折ニューイングランドの小売り商の机上に貼り付けられている金儲け方に関するいわば物語詩とほとんど変わらない」と説明を加える。

世界主義者は指摘された地方の出身者であるかのように，「ピューリタンの末裔への偏見」は止めてほしいと「穏やかに抗議」する。するとチャーリーは「いらいらして」，「誰がピューリタンであろうと，アラバマ人のぼくは敬意を表さねばならないということですかね」，「一連の不機嫌で自惚れの強い老マルボリオ［『十二夜』（Twelfth Night）の気取った執事］たちをね，シェイクスピアが喜劇で存分に大笑いしている」と反論する。

これに対して世界主義者は「下位の者の癇癪に対して上位に立つ者への辛抱強さを表し」ながら，「ポロニウスの話で何を言おうとしたのかね」，息子への「彼の助言をどのように特徴付けるかね」と問うと，チャーリーは「誤っていて，致命的で，中傷的ですね」，「それに父が息子に与えるには――醜悪です」，これから外国に向かおうとする息子に「きつい処世訓を詰め込むなんて」と厳しく批判する。

世界主義者は，「そうではない。ポロニウスはとりわけ『おまえの友でも，いったんよしとした友は引っ掛け鉤でしっかり逃がさぬようにせよ』［『ハムレット』（Hamlet）第一幕，第三場］と言っていないか」（176）と問う。チャーリーは「レアーティーズは，コルク栓をする人が確認済みのボトルを維持管理に最善を尽くのと同じ原則で，その友――信頼済みの友の世話に最善を尽す」のは，友に「特別な用途があるからだ」と答える。世界主義者はこれに「そんな批判は駄目だ」と応えると，チャーリーは「真実が駄目だって。その内容には高尚で，英雄的で，私心のない努力を勧めるようなものがありますか。『持ち物を売り払い，貧しい人々に施しなさい』［「マタイによる福音書」，19：21］というようなものが」，ポロニウスは「不信仰な忠言者」であり，「敬虔な助言者ではまったくない」と言って毛嫌いする。

それを聞いた世界主義者は，「きみの提言はポロニウスと彼の発言に対するわたしの以前の考えを少しばかり混乱させるな」（177），「いまではシェイクスピアがポロニウスの口を借りて言っている言葉にどんな風な意味合いを持たせたのかはっきりとは分からないな」と語る。チャーリーは世の見解を紹介して，シェイクスピアの意図「は人々の目を開かせるため」，あるいは「人々の品性を堕落させるため」と解する一方，「明白な意図はまったくないが，結果的に一挙に」この二つのことを果たしていると解する人もいると紹介し，自分は「そのいずれも拒む」と主張する。

すると世界主義は，「シェイクスピアは妙な男だ」，「時にいい加減に思われ，つねに信頼に足るとは思われない」，「彼には啓蒙的であると同時に迷わすような，ある種の――どう呼んだら良いだろうか――隠れた太陽があるように思われる。いま，時々考えてきたその隠れた太陽が何であるのかを口に出して言うのをためらう」と，そのシェ

イクスピア論を語り出す。

チャーリーが「それは本当の明かりだと思いますか」と，再び相手のグラスにワインを注ぎながら尋ねると，世界主義者は「それに関する明白な問いに答えることは辞退することにしたい。シェイクスピアは神のような存在でなければならないのだから。……シェイクスピア自身は崇敬できるが，糾弾はできない。しかし，謙虚にするなら多少は彼の登場人物を念入りに討議してよかろう」（178）と応じ，シェイエクスピア作品の数多い登場人物の中でも，『冬物語』に登場する泥棒行商人オートリカスを「いつも頭を悩ませる」人物として話題にする。

このオートリカスは常習的に人を騙して盗みを働く，「幸せな，幸運で意気揚々とした，思わず心を奪われそうになってしまうほどの悪質なごろつき」だが，世界主義者は彼の「舞台で高笑いして，『ああ，正直って野郎はなんてばかものなんだ！　それに正直の義兄弟の信頼って野郎はなんて単純な紳士なんだ！』」という発言を取り上げ，「正直，つまり信頼は ── すなわちこの世でもっとも神聖なものだが ── ペラペラとまさにいとも簡単に声に出して言われている。このごろつきが登場する場面は彼の信念を実証するために意図的に考案されているように思われる」，ただ「実際にそうだと言っているのではなく，それどころか，そのように思えると言っているのだ」。「そう，オートリカスはスリを働くより金銭を請う方が得るものは少なく，ヘマな盗賊より熟達した詐欺師の方が得るものは多いという信条に基づいて行動する生活の苦しい悪党に思われ」，その上「悪魔に教え込まれた新米のオートリカスは，まるで天の衣をまとったかのように喜びに満ちている」のに「悩まされるときに，唯一の慰めは，彼を描き出す強力な想像力の中以外にこの世にそんな生き物はいないという事実にあるのだ」と述べる。さらにこの「オートリカスにはユーモアがあり」，「ユーモアは概して欠点を補う特質だと見なされるが，オートリカスの場合は例外で，いわば悪ふざけに油を差すのは彼のユーモアだからだ」と解説する。

チャーリーは「オートリカスのことは世界主義者程度には認めても」，ポロニウスには依然として否定的で，「魂の抜け殻」（179）とさえ酷評する。これに対し世界主義者はひたむきなのはいいが，言葉が過ぎるのはよくない上に，ポロニウスは老人であり，「礼儀正しく扱われるべきで」，「老齢は成熟」，「未熟より成熟の方がよい」と弁護する。だが，ポロニウス攻撃はやまず，チャーリーは自分が興奮して攻撃するのは飲んでいる「ワイン」（180）のせいだと言う。

チャーリーがあまり飲んでいないことを知る世界主義者は，「もし人が別な人を酔わせてやろうとして，この酔わせられた人が同量飲めるほどの人だったら，比較的安く済もうね。きみはどう思う」と問う。チャーリーはその仮定の問いが遠回しに自分のことを言われていることに気付き，「立腹した表情で」「やばくない，間違いないよ，あえて友人について滑稽な仮定話をするなんて」と返すと，「個人を対象にしたのではなく，一般論さ。そんなに怒りっぽくてはいけないよ」と言われる。チャーリーは「怒りっぽいとしたら，ワインのせいさ」と飲んでもいない酒のせいにするので，世界主義者は「グラス一杯さえまともに飲んでいない」，「自分は 4 回目か 5 杯目だ」と指摘する。

自分の杯に注げと言いながらも，あらたな葉巻も吸えと勧め「愉快に興じよう」と誤魔化して，さらに酒を飲まない人を批判するチャーリーは，世界主義者から「口やかましくなく陽気でいられないのか」（181）とまたたしなめられると，今度

は「自分はあまりにも陽気に飲みすぎた」と言いながら，自分で口に出した「陽気」について，「近頃，これが増えていないだろうか」と話題を変えてしまう。

今度もこれに応じて世界主義者は「そうだね，その事実を歓迎するよ。これほど人道的精神の前進を裏付けるものは他にないね」，「以前の，人道的精神が劣っていた時代は……陽気になるのは主に炉辺と食卓に限られていた」が，今日では「至る所にある ── 真昼の光のように放たれる恵みだ」と述べる。これにチャーリーは「本当だ，本当にね，またも僕と同意見だ」と同感を示し，この「陽気」はあらゆる部門と専門職に広がっている」として，上院議員，著述家，講師，医師，聖職者，外科医と名を挙げ，「そしてその次は絞首刑執行人」（182）へ及ぶことになるでしょうと述べる。世界主義者はこれを受け，「この陽気の精神がさらに進めばついにはその執行人も不要にできるだろう。殺人者もいなくなり ── 絞首刑執行人もなくなる。そして，きっと全世界に陽気さが広がれば，キリスト教化された国における罪人の場合同様に，殺人者について語るのは不自然なことになろうね」と楽観的に語る。

するとチャーリーは皮肉っぽく，もし絞首刑執行人が「職を奪われたら，何に取りかかれるでしょう，屠殺ですかね」と問う。これに対して言葉を濁すような返答をした世界主義者にチャーリーが「本気ですか」と迫ると，相手は話題を「陽気さの前進」に戻し，「結局，これが人間嫌いのような厄介な問題にさえ影響を与える希望を持っていなくもない」と発言する。チャーリーが「陽気な人間嫌い［厭世家］ですって」，「陽気な絞首刑執行人だなんて不機嫌な博愛主義者と同様，想像がつきませんね」と反論すると，世界主義者は「私の風変わりな友人が，君がアライグマの毛皮と呼ぶ彼のことだが，その一例」で，前に登場してきたこの奥地人ピッチは「不機嫌な態度の下に博愛主義的な心を隠していた」と説明する。

世界主義者はさらに言葉を続け，逆に「時代が進み，陽気な人間嫌いが現れたとき，これと逆のことが起こり，愛想のよい態度の下に人間嫌いの心を隠すのだ。つまり，陽気な人間嫌いは新種の怪物だろうが，それでも少なからず原種に改善があろう，というのも人々に嫌な顔をしたり，非難したりするかわりに，例の哀れな狂った老翁ティモン［『アテネのタイモン』］のように，バイオリンを手に歩を進め，刺激を受けた世界を踊らせるだろう。一言で言えば，キリスト教化が進めば精神的な向上を期待できない人々も外観的に角がとれてゆくように，陽気化も進んでゆくと，似たり寄ったりの結果となろう。だから，この陽気化のおかげで，がさつな話し方を矯正された人嫌いが，洗練さと温和さを帯びることになるだろうね ── 実際に，現在博愛主義者のなかには，今名前が挙がった僕の一風変わった友を見ても分かるように，人気があるようには思えないのがいるが，来る世紀の人嫌いがそれとほぼ劣らぬぐらいの人気が出る程度にはなるだろうね」（183）。

少し抽象的な思索に飽きた様子でチャーリーは，「次の世紀ではどんな風であれ，今世紀ではきっと，博愛主義者と人嫌い以外のどんな人であろうとも，陽気でなければなりませんね，さもないとその人は何の価値もない。いっぱい，いっぱいに満たして，陽気になりましょう」と応じる。世界主義者は「こっちは精一杯やっているよ」と答え，チリのインカ帝国を滅ぼしたピサロが宝物庫に入ってなかの黄金を目にした時の信じがたい思いを引き合いに出し，「そして，自らの不誠実のために人に全く信頼を置けず，この時代の物惜しみしない陽気さは偽りではないかと疑う輩もまさにそう

なのだ。彼らはそれなりの小ピサロだ ── まさに気品ある陽気さに驚かされてそれを本気にできないのだ」と説明する。チャーリーが「僕とあなたにはそのような疑いはない」と熱く答えると，世界主義者は「分業」で，自分は飲むのを分担し，チャーリーには「陽気なことがら」の担当を提案し，さらに「ワインは心を開き，そして」と言葉を続けようとすると，チャーリーが「どの心も氷に閉ざされていますが，ついにはワインが溶かして，あらゆる大切な秘密を秘めながらその下で成長を始めた柔らかい草と香りのよい牧草を露わにするのです」(184) と言葉を挟む。

するとこれを受けた世界主義者はすかさず，「同じように自分の小さな秘密の一つがいま外へ現れそうだ」と述べてから相手に「信頼」してよいかと問い，相手の承諾を得ると，なんと「いま必要としている，緊急にね，お金をだ」と突然の借金の申し込みをする。

第 31 章の章題は「オウィディウスのどのものより驚くべき変身」で，この変身とは，それまで世界主義者から借金の申し込みがなされる前までは調子よく彼に合わせてここまで対話を進めてきたチャーリーの変身のことであり，この年下の若者は借金を求められて変貌する。

チャーリーは「突然眼前に現れた落とし穴か噴火口から［逃れる］かのように椅子を押し返し」，狼狽して「金が要るだって」と確かめるかのように言うと，それに相槌を打って世界主義者は，「僕に 50 ドル貸してくれるということさ」，「そう親愛なるチャーリー，君のためにさ，君がおかげでその高貴な温情をそれだけよく証することになるからね，親愛なるチャーリー君」と説明する。すると本人は「親愛なるチャーリーはやめてくれ」と叫び，まるで長旅の途中で慌てて旅立つかのように上着のボタンを留めながら立ち上が」る。そこで世界主義者は「なぜなんだ，なぜだ，なぜなのだ」と「苦しげに顔を見上げる」。するとチャーリーは「なぜはやめてくれ」と足を放り出し，「くたばれ，あんた。物乞い，ペテン師 ── これまで一度も人の姿でこんなにだまされたことはない」と言い放つ。

次の第 32 章の冒頭では，語り手が相手の話にともかく合わせようとするお調子者だったチャーリーが，「古い成分から新しい創造物が勢いよく飛び出る」(185) かのような変貌を遂げたと語る。

世界主義者はこの変身した友を一瞬じっと見据え，ポケットから 10 枚の 5 ドル金貨を取り出し，腰をかがめて自分の周りに一枚一枚置いて，「降霊術師の雰囲気を漂わせて」一歩退く。一方，チャーリーはその輪の中で，「突然心を奪われ，うまく魔法にかかったような兆候を示していた」。世界主義者は彼に「再び現れよ，再び，もう一度現れよ，前の友よ」，そして「戻ったしるしに『親愛なるフランク』という言葉を」と声を掛ける。

すると我に返ったかのように，チャーリーは「親愛なるフランク」と叫んで，その輪の外へ出る。そして「なんておかしな男なんだ……どうしてそんな金に困っているなんて馬鹿げた話ができるんだ。でも僕は，面白い冗談はよく［深く］味わいすぎるものだから，それを台無しにしたりできない。当然，調子を合わせたのですよ。僕の方はあんたが僕に取ったひどい態度をそのままこっちも取ったのです」，「さあ，この架空の仲違いの些細な出来事はこれまでの心地よい現実を強めてくれるだけです。また腰を下ろし，ボトルを空けましょう」と，相手の予期せぬ金の無心に慌てふためいて思わず本性 ── 世界主義者を口で言うほど親しく思っておらず，どうも心底に何かを秘めているかのように相手の話に合わせてきたお調子者 ── を暴露してしまった自分の言動を，糊塗し

ようとする。

世界主義者もこれに応じ，「君が今しがたやった以上に上手にフォローしてくれた男はいない。わたしより君は上手に演じたよ」(186) と褒めちぎると，チャーリーは渡りに船とばかり，愚かにも「かつてアマチュアの劇団に所属していて，だからですよ」と応じ，再び杯を満たして別な話をしようと言う。

そこで世界主義者は，ある「常軌を逸した紳士の物語」を語ろうとする。

しかし，作者はすぐに世界主義者に物語を語らせず，次の第 33 章ではまたもや第 14 章同様に，語り手に閑話休題的に，これまでこの小説に登場した ── 特に，異様な服装で，非現実的な振る舞いをするとの批判を浴びても仕方の無いような，前章の世界主義者を念頭に ── 人物と現実の人間との乖離について，作者と読者双方の見解を述べさせている。

「娯楽作品において，そのような作品を取り上げておいて，自分は現実を忘れ，一時，何か違ったものを求めたくなくはないと十分明らかにしている人に，実生活への厳格な忠実性を要求されるのは妙である。そう，実際に変なことなのだ，飽きているものをやかましく要求するのは。理由は何にせよ，実生活が退屈だと思っている人はどんな人でも，実生活から注意をそらしたい人に，その退屈に忠実であるべきだと要求するのは」。

また，このほかにも「空想によって」実生活とは異なる「場面を喚起させられ」，しかも「登場人物は」実生活で出会う人々であるようにと注視する」輩がいる。彼らは，「実生活で人々は礼儀作法のおかげで舞台では許される遠慮の無い振る舞いが許されないように，虚構作品では単に娯楽だけが求められているのでは無く，心底では実生活そのもの以上の現実性を期待している」のだ。このように彼らは新奇さを求めているが，自然さも求めているのだ。しかし，自然は足枷をはずされ，活力を与えられ，その結果変容させられる。このように考えると，虚構に出てくる人々は戯作の人々のように，実際には誰一人としてそのとおりにやるわけではないやり方で服装をし，話し，行動しなければならなくなる。「それが虚構作品の場合であり，宗教の場合と同様なのだ。つまり，虚構作品は別世界を提示するが，なおかつ［現実世界との］結びつきが感じられる世界を提示しなければならないのだ」(187)。

「そういうことで，善意の努力がある程度大目に見られれば，きっと作家には ── 眼前では道化があまりにも多様な色彩の外套姿で現れたり，あまりにも奇想天外に跳ね回ったりなど決してありえない気ままな娯楽愛好者の，作家が理解しているような言外の望みに，あらゆる場面でひたすら応えようとするような作家には ── 多少のことが許されよう」。

最後に，語り手は「もう一言」と言い添えて，この章を終えている。「自分は決して間違えていないとどれくらい納得できるかを意に介することなく，どんな場合でも身の証を立てようとすることがいかに無益なのかは誰でも分かっているが，自分の同類から認められるのは大切なことで，創作物に対してさえ厳しい批判が想像されれば，そのままでいることは決して容易なことではないのだ。こうした弱音を吐けば，激しい冷笑家が相手の世界主義者の賑やかな楽しい気分と，飲み仲間相手の自制した温厚さとの間に何か調和的なものを感じ取れると思うような読者諸氏には，こうして別な登場人物に見られる同類の明白な矛盾が通例に従って，謙虚に陳謝しようと心掛けられている例の章を参照されたしとする理由が，お解りだろう」。

この末尾にある「例の章」とは，この第33章同様に，語り手に作家の描く登場人物の性格に見られる矛盾に対する弁明を述べさせた，作者メルヴィル自身の自己弁護的な章である第14章のことを指しているのは，明らかである。

そして次の第34章で物語は本筋に戻り，世界主義者によって，いよいよこの作品中の第4の挿話である「チャールモント，かの常軌を逸した紳士の物語」が語られる。

「チャールモントはフランス系の若い商人で，セント・ルイスに住んでいた ── 心に欠陥はなく，若い独身者以外には滅多に見られない完全度の，あの優れた魅惑的な思いやりを備え，時折，驚くべき類いの，潔いほどあっけらかんとして機知に富んだ陽気な男だった」。多くの人に愛されていたが，「29歳のときにある変化が起」こる。「一夜にして髪が白くなる人のように，一日で愛想のよい人間からムッツリした」人間と化した。すれ違う友も無視し，「信頼する友」も明らかにまったく無視したのだった。周囲の人々は憤慨したり，優しく激変の理由を尋ねたりしたが，その両方に「彼は背を向けた」。

「それから程なくして，皆が驚いたことに，商人チャールモントの破産が公示された。同日，彼は街から引き払ったことが伝えられたが，債権者の利益のために責任ある管財人たちの手に彼の全財産が委ねられた後のことだった」(188)。彼の行方を思いつく者は誰もいなかったが，破産前の彼の「突然均衡を失った精神状態に帰される」態度の激変から「自殺も憶測された」。

「歳月は流れ，春，それもなんとまあ明るく晴れた朝，チャールモントがぶらぶらとセントルイスのあちこちのコーヒーハウスに姿を現した ── 陽気で，礼儀正しく，思いやり深く，気さくに，それにまさに贅沢な上品な出で立ちで。健在であるだけでなく，まさにもとの彼そのものだった。付き合いの長かった人々に出くわすと，彼の方から近づき，相手も歩み寄らずにはいられないような態度であった」。また，予定した「旧友宅を直接訪ねたり，［不在なら］名刺と挨拶の言葉を残すかし，猟の獲物の贈り物やワインの詰め籠を送った旧友も幾人かいた」。

「世間はときに厳しいほど容赦がない」が，彼に対してはそうではなかった。「彼のように戻ってきた者に対して，以前の愛が蘇ってき」，「再び湧き上がってきた関心は」，「破産から大分経って，いったい彼は経済的にどううまくやっているのか」というささやき声の形を取った。「噂というのは返事に窮することはまれで」，その返事とは「彼はフランスのマルセイユで9年過ごしてまた富を築き，戻ってきてそれ以後はもっぱら愛想よく人付き合いをしているという」内容だった。

それからまた年月が経ち，「正道を逸れて復活した」チャールモントは「変わることなく，むしろその高貴な資質によって，元気づける太陽のような高い評判を浴びて金色に輝くトウモロコシのように大きくなった」。しかし人々の心には「依然として表面には出てこない不思議は」，以前の「彼の変化の原因」だったが，「誰もここで彼に尋ねるのは適切なこととは思わなかった」。

だが，ついに彼の自宅での晩餐会のあと，一人残った古い知己である客が「彼の人生の唯一の謎」について尋ねた。すると「彼の陽気な顔つきは深い憂いを帯び，しばらくの間震えながら黙ったままだった」。それから客にワインのデカンターを差し出して，「震え声で，『いや，ならぬ，手塩と時間を掛け，墓所一面に花々が咲き誇っているというのに，誰がただ謎を知ろうとすべてを再び掘り起こそうとするものか ── このワインを』と答え」(189)，相手と自分のグラスにワインを満た

して，彼は言葉を続ける。「もし将来に破滅が間近に見え，自分には人が分かっていると思って交友を気遣い，自分のプライドに気をもみ，そして，前者への愛と後者への恐れのせいで，世間に前もって備え，あらかじめ罪を一身に背負うことで，世間に罪が及ばないようにするならば，いまわたしが抱いている人物と同様のことをし，その人物同様に，苦しもう。しかし，どれほど幸運であり，感謝することだろうか，彼のようにすべてが降り懸かったあと，再び少しでも幸せになれるなら」。これを聞いた「客は帰るときに，外観的には財産同様，心の回復はあるにせよ，チャールモントの古い狂気の痕跡が残っており，友人が危険な琴線に触れるのはよくないという確信を抱くのだった」。

このようにチャールモントの話を終えると，世界主義者は聞いていた相手のチャーリーに感想を聞いているのが，次の 35 章である。

チャーリーは「非常に妙な話だ」と答え，「本当の話か」と尋ねると，世界主義者は「面白がらせるために」した話であり，その「妙なところ」が「事実と相反する作り話」たる「ロマンス」なのだと説明したあと，チャーリーに「チャールモントが変わるさいに，自身がそれを基に行動したとほのめかしたような，先行動機が……人間社会の本性によってそもそも正当化される類いのものかどうか，君自身の心に委ねているのだ。君は，一例として，友によそよそしくするだろうか ── 愉快な友が，例えば，突然文無しであることが発覚したとして」と尋ねる。チャーリーは「よくそんなことを聞けるね，フランク。わかってるだろう，僕だったらそんな卑劣なことは軽蔑することを」と答え，「多少どぎまぎしながら立ち上がりながら」，悪酒のせいで気分がよくないと訴える。一連のやり取りで彼の陥っている苦境を察している世界主義者は，明日の再会を期して彼を解放してやり，退出させようとする。そこでチャーリーは，急ぎ足でその場を離れる。だが，彼はこれ以降，なぜか二度と姿を現さない。

作者がこの若者に再登場させていない理由は想像するしかない。これまで見てきたように，数章に跨がり，話題が多岐に亘る世界主義者とチャーリーの会話は，最後に世界主義者が突然，友チャーリーに金を貸してくれないかと言い出して，その反応を冷静に観察する内容となっているが，間に小説家の登場人物の性格論を閑話として挟んだりしているものの，二人の長いやり取りには一貫して「友情」が話題として扱われていることに気付く。この話題は，次章以降で世界主義者の新たな相手となる二人の登場人物 ── 師とその弟子 ── との間でそれぞれ激論が戦わされているので，作者はその前座に世界主義者の仮初めの友としてチャーリーを登場させ，心底に何かを秘め，友としての資質に欠ける本性を暴露させた時点でその役割を終わらせ，「友情」の話題を新たな登場人物らに引き継がせようとしたのであろう。

［次の本稿第 7 章以下は，（下）に続く］

注

（1） *A Companion to Melville Studies*（Westport, Greenwood Pres, 1986), ed. John Bryant, p. 316. なお，引用末尾の「問題小説」という表現は，この作品の執筆以前から出没してはアメリカ社会を騒がせていた詐欺師の存在を社会問題視して，文字通り，これを扱った問題小説であるという文学用語的な意味でよりもむしろ，この『信用詐欺師』の主題がメルヴィルの他の作品に比べ，なかなか解き明かせずに評価が定まっていない，厄介な作品であるという意味で用いられている。

（2） Melville の友人の文芸評論家 Evert Dyckinck は弟へ宛てた手紙で，信用詐欺師は「ヴォルテールやスウィフトのような風刺作家にとっては大きなテーマだ ── それに，アメリカ独自の創案だ」として，アメリカの生活模様を描くテーマとして関心を表明している。*The Melville Log: A Docu-*

mentary Life of Herman Melville, 1819–1891, ed. Jay Leyda（New York : Gordian Press, 1969），Vol. 2, p. 563.

（3） *The Confidence-Man : His Masquerade*（New York : W. W. Norton & Company, 2006）. 以降丸括弧内の数字はこのテキストからの引用頁を示す。

（4） King James Version の聖書を参考にしている。“charity” のかわりに “love” を用いている聖書もある。

（5） Samuel Eliot Morison はこの作品が執筆された時代の前後の様子を，次のように解説している。

19 世紀中葉の「イズム」（さまざまな主義や学説のこと）の大繁殖地は，ニューイングランドそのものではなく，ニューヨーク州中部の起伏する丘陵やエリー運河沿いの，ヤンキーたちが住みつている地域であった。この人々は，キリスト教の信仰復興運動やペンテコステコステ派の信仰（キリストを信ずる者に聖霊が降るという信仰）にきわめて敏感であったので，その地方は「聖霊の火で焼き払われた地方」と呼ばれた。フリーメーソン反対運動は，そこで始まり，禁酒運動は力を増し加えた。ジョーゼフ・スミスは，1830 年にニューヨーク州パルマイラで『モルモン教書』（4 世紀の預言者モルモンの著とされる）を出版し，その地でブリガム・ヤングをモルモン教に改宗させた。おそらくアメリカ最大の福音宣教者チャールズ・G・フィニーは，ニューヨーク州各地を説教して回り，多くの人の魂をキリストに導いた。1812 年の対英戦争の老兵ウィリアム・ミラーは，ニューヨーク州ハンプトンで，キリストの再臨は 1843 年の 10 月 22 日に起こる，という理論を編みだし，ミラー派すなわちキリスト再臨派を創始したが，この派の教義を信じた何千人もの人びとは持物を売り払い，しかるべき衣服を身にまとって屋根，丘の頂，干し草の山の上でキリストの再臨を待ち望んだ。そのように高い所にのぼったのは，天国に近くなると信じたからである。ニューヨーク州ニュー・レバノンのアン・リーばあさんと，ニューヨーク州ジェルサレムのジマイマ・ウィルキンソンは，独身主義のシェーカーおよび「ユニヴァーサー・フレンド」派の共同社会を創設して，男性の性衝動を昇華させようと試みた。ジョン・H・ノイズは，これとは逆に，オウナイダ・コミュニティーを設けて性的放縦によるカタルシスならびに人格完成を追求したが，この共同社会は，結局，美術・工芸団体になり下がった［具体的には，銀食器などの製造に従事した］。この世との交流の手段を求めるあの世のもろもろの霊は，適切にも，聖霊の火で焼き払われた都会，ニューヨーク州のロチェスターを選んだが，この都会で 1848 年に，フォックス姉妹が降神術でテーブルを傾けてみせて，あたり一帯の人びとを興奮させた。この姉妹の演技から始まったのが降神術の流行で，それからの十年間に，「天使の領域」からのメッセージを集録することに専念する新聞や定期刊行物が六十七種にも及んだ。なお，ニューヨーク州中部から，ニューイングランドの「イズム」の大群が，バッタのように飛び立って，西部に舞い降りた（『アメリカの歴史 3　ヴァン・ビーレンの時代 ── 南北戦争　1837–1865 年』西川正美翻訳監修，集英社文庫，1997, 148–150 頁。訳は一部手を入れて借用した。原文は，*The Oxford History of the American People Volume Two, 1789–1877,* “Chapter XIII Ferment and Culture in the North 1820–1850,” pp. 272–273）。

（6） 本文には，“Natives of all sorts, and foreigners ; men of business and men of pleasure ; parlor men and backwoodsmen ; farm-hunters and fame-hunters ; heiress-hunters, gold-hunters, buffalo-hunters, bee-hunters, happiness-hunters, truth-hunters, and still keener hunters after all these hunters. Fine ladies in slippers, and moccasined squaws ; Northern speculators and Eastern philosophers ; English, Irish, German, Scotch, Danes ; Santa Fé traders in striped blankets, and Broadway bucks in cravats of cloth of gold; fine-looking Kentucky boatmen, and Japanese-looking Mississippi cotton-planters ; Quakers in full drab, and United States soldiers in full regimentals ; slaves, black, mulatto, quadroon ; modish young Spanish Creoles, and old-fashioned French Jews ; Mormons and Papists ; Dives and Lazarus ; jesters and mourners, teetotalers and convivialists, deacons and blacklegs ; hard-shell Baptists and clay-eaters ; grinning negroes, and Sioux chiefs solemn as high-priests. In short, a piebald parliament, an Anacharsis Cloots congress of all kinds of that multiform pilgrim species, man.”（16 and 17）と，多種多様な乗客が記されている。

（7） 義足の白人は，このタンバリンを持った黒人を白人の変装と見なしたが，作者のメルヴィルはタンバリンを手がかりに，さらには義足の白人の指摘で，1850 年代も盛んで西部にも知れ渡っていたミンストレルショー（minstrel show）の，黒

人に扮した白人の芸人を読者に想起させようとしている。もっとも，それならば逆に，乗客にもすぐ白人の変装だと見破れるはずであろうに。

ちなみに，このあとメルヴィルは実際に第6章で，“negro-minstrels”「黒人芸人によるミンストレル」(41) という語を使っている。

(8) 簡単に紹介した通り，この男は離婚後死去した妻の喪に服していたので，喪章を帽子に巻いていたのだが，読者にその理由が明かされるのが8章も後の第12章 (69) と，かなり遅い。種明かしの内容がそれほど重要なこととは思われないこの程度の仕掛けの場合は，深い意味を期待する読者の失望と反動とは大きく，作品評価に響かざるを得ない。

(9) 本稿の筆者は，この喪章の男が商人の名刺を拾った黒人と同一人物と判断して読んでいるのだが，ここで再びこの同一人物か否かの問題に触れてみたい。すでに本稿5頁で触れた通り，複数の詐欺師登場説は完全に否定できないが，以降の物語には，詐欺師がカモにした乗客が次の詐欺師のカモになっている場合があり，そのときに詐欺師が同一人物でないと詐欺の成立に導く対話がスムーズにできない ── より正確に言えば，同一人物であった方がその対話に合点がゆく ── と思われる場面がいくつか出てくるが，この黒人と喪章の男の場合はその嚆矢である。

また，この段階ではまだ不確かだが，黒人が挙げた8名の筆頭の「喪章の紳士」が黒人が姿を消したあとに舞台に登場しているのも，黒人に扮した詐欺師が乗客に，読者にこのあとの詐欺師の変装の姿の予告である可能性がある。

(10) 本文第9章の「シャンパン付きのディナーのあとで自分のソファに座って，うちの大農場のたばこを吸っているところに，もし暗い顔の男がやって来たら，なんと退屈なことか」(57) の中の「うちの大農場のたばこ」という表現に，彼が南部の大農場の経営者の子息であることが読み取れる。

(11) セミノール族の被った災禍については，次の文献(1)と(2)を参照。

(1) “Seminole Wars,” especially underlined part (*mine*), in *Encyclopedia of Americana,* p. XX: “**SEMINOLE WARS,** the military campaigns waged by the government of the United States against the Seminole people. The first, a short struggle in 1817–1818, was, in a sense, a continuation of the Creek War (1813–1814). It was fought largely out of U. S. ambition－spurred especially by Gen. Andrew Jackson－for possession of Spanish Florida, which fell to the United States shortly afterward. The second, usually referred to as the Seminole War proper (1835–1842), was the fiercest war waged by the government against Native American peoples. It left more than 1,500 soldiers and uncounted civilians dead. The campaign cost well over $20 million. Because of the evident duplicity of the U. S. government, the Seminole Wars created an indelible blot on Native American－white relations.

“The two conflicts had sources in common: frictions engendered by the War of 1812; the presence of many black slaves, who had fled to the Seminole for protection; the failure of the government to control Georgia and Florida slave raiders; and the injustices of treaties negotiated with the Seminole under questionable circumstances.

“The campaigns of the second war were an outstanding demonstration of guerrilla warfare by the Seminole. The war chiefs Jumper, Alligator, Micanopy, and Osceola, leading 3,000–5,000 poorly armed warriors, were pitted against four U. S. generals and more than 200,000 troops. As the hostilities dragged on, the frustrated U. S. forces turned more and more to desperate measures in order to end the war. General Thomas S. Jesup seized Osceola under a flag of truce and imprisoned him, confident that this would end the resistance. Although Osceola died in prison in 1838, other Seminole leaders took up the battle, and the war continued. A nominal end to the hostilities came in 1842, but no peace treaty was ever signed. Most of the Seminole were removed west, to the Indian Territory (now Oklahoma), but a few hundred escaped into the Everglades, where their descendants still live.” (FREDERICK J. DOCKSTADER, *Author of “The Song of the Loom”*)

(2) 「独立革命から南北戦争後まで (1760–1880年代)

独立戦争では，大半の部族がイギリスと同盟して愛国派軍に対抗した。そのうち，五大湖周

辺の北西部諸部族は，1763 年のポンティアク戦争から 94 年のフォールン・ティンバーズの戦での敗北まで，本国からの独立革命を遂行しつつあった植民地人に対して，自らの自由と解放のために戦ったのである。この戦いは，1812 年戦争（第 2 次英米戦争）の際にショーニー族族長テクムシによってひきつがれ，彼は全インディアンの大同団結を提唱したが，大望を果たせず，W. H. ハリソン将軍に敗れて戦死した。同じころ南部ではチェロキー族などが文明化政策を受け入れて農業化・文明化への道を歩み，黒人奴隷制度も導入したが，クリーク族の抗戦派は文明化を拒み，A. ジャクソン軍と戦って敗れ，広大な領土を奪われた。こうしてミシシッピ川以東における優位を確立した合衆国政府は，1830 年にインディアン強制移住法を制定して，ミシシッピ川以東の諸部族に同川以西への移住を強制した。諸部族は多大の犠牲者を出しながら長い〈涙の旅路〉をたどった。セミノール族は強制移住に抵抗して黒人と結束して戦ったが敗れた。

40 年代の急激な領土膨張とゴールドラッシュによって，南西部や大平原，グレート・ベースンや太平洋沿岸の諸部族は，押し寄せる移住者の群れと合衆国軍に初めて向き合うことになり，コマンチ，アパッチ，ナバホ，シャイアン，スー，アラパホなどの諸部族は果敢な抵抗を開始した。南北戦争が起こると，チェロキー族やクリーク族などのインディアン地方（現在のオクラホマ州東部）の諸部族は南北両軍の戦略にまきこまれ，部族間のみならず部族内が敵味方に分かれて戦う悲劇を強いられた。他方，戦争中でもスー族の討伐や，〈サンド・クリークの虐殺〉など大平原諸部族への圧力は一層強まった」（DVD-ROM 世界大百科事典，「アメリカ・インディアン」の項より。下線は本校筆者）。

（12） これは，作品中の第 1 番目の挿話となる。Melville は長編小説によく小話を挿入する作家である。

（13） 牧師の紹介している義足の男が言ったと伝えている言葉は，確かに第 3 章でのこの男の言葉とほぼ同じ ──「やつはどこかの白人のペテン師で，ひどく体をよじって色を塗り偽装している」（21）──で正しい。ところが，実際には牧師はこの義足男の言葉を聞く前に，すでに黒人の身元保証人を捜しに義足の男の眼前から姿を消しており，牧師がこの言葉を覚えていようもないはずだ。これは単純に考えれば，以前の作品でも，ときどきこのような不可解な，軽率とも言えるような過ちを犯しているメルヴィルの再犯と思われる。H. Bruce Franklin も，すでに *The Wake of Gods: Melville's Mythology*（Stanford: Stanford University Press, 1963），p. 167 で，この聖公会牧師の嘘を指摘している。

（14） 「悪魔がイヴをたぶらかしていくら稼いだというのだ」の意味だが，ミルトンの『失楽園』では，神の子イエスに対する寵愛を嫉んで戦を起こし，敗北を喫して地獄に落とされたサタンが，神への意趣返しとして思いついたのが，神の天地創造を台無しにすることだった。そのために，地球の万物の長として創造された人間の堕落を企て，蛇に化けてエデンの園で暮らすイヴを誘惑し，これを成就させた。サタンは，一応は，「計り知れない見返りを得た」ことになるわけで，それに言及していよう。

（15） *Shadow over the Promised*（Baton Rouge and London, Louisiana State University Press, 1980），Carolyn L. Karcher, p. 232.　本稿の筆者はこのあとに続く 7 段落を，金のカフスボタンの紳士と召使いが，主人とその黒人奴隷の関係にあり，また，この紳士が「南部貴族」で職員が「北部資本主義者」の代表の関係にあるという Karcher の示唆に富む指摘を参考に，記している。

（16） 間接的であっても黒人奴隷から搾取した金で搾取者が慈善に金を投じる矛盾は，すでに Karcher（23）が指摘している。

（17） メルヴィルの奴隷制そのものに対する批判的態度は以前から『マーディ』などの作品から窺えるが，この記述がメルヴィルの肉声だとすれば，奴隷制による南北対立の激化から想定される連邦分裂という最悪の危機を回避したい彼なりの思いの証左となろう。

（18） 語り手が一人になったときの職員の様子をこのように「哀れをそそる」といったような形容の仕方は，学生との出会いの直前の「憂いに沈んだ」喪章の男の様子を想起させるが，喪章の男の場合は，離婚したものの死去してしまった妻の喪に服していたからだと考えられるが（54），この職員の場合，その理由となるものは以降に何も語られていない。可能性として考えられるのは，喪章の男も職員も同一の詐欺師であり，離婚した妻の死去は詐欺師に降りかかった本当の話で，一仕事を終えて一瞬仮面を脱いで素顔の自分を垣間見させた描写なのかも知れないということだ。

（19） その題名は「信頼獲得の，私欲なき努力に対する拒絶の繰り返しから，不本意ながら推論される

人間不信を，それとなく伝える頌歌」（44）というものである。

（20） この話は，作品中の第 2 番目の挿話となる。

（21） この第 12 章の冒頭でメルヴィルは，喪章の男の妻ゴーネリアの外観と性質に触れて語り手に，「その不幸な人間［＝喪章の男］は異例なほど邪悪な性質の人間を妻に娶ったように思われ，こうした性質は，人間を形而上的に愛する者にほぼ疑いを挟みたい気にさせよう。人間の姿がどんな場合でも人間性の最終的な証なのかどうか，人の姿は時に拘束のない，どうでもよい一種の仮の住まいでなくてもよいのかどうか，そして，きっぱりとトラセアの「悪徳を憎む者は，人間性を憎む」という発言（彼自身が非常に善良な人間だったことを考えると，不可解な発言だが）を挫くためには，自己防衛で，それを善人以外は人間でないという納得のゆく格言として掲げるべきではないのかどうか，という疑いを」（66–67）などと語らせているが，これが，例えば，中心人物である詐欺師の外観や内面との関連性を言及しようとしたものとも思えない。

（22） この「抑制」のイメージは，第 5 章の第 4 パラグラフまでの，語り手による喪章の男のやはり抑制された雰囲気の描写を思い起こさせる。

（23） 第 14 章は，前章の終わり近くで，人への信頼の厚い善人として語られてきた商人が，酒で酔った勢いでそれまでの言動とは裏腹に，心の底にあった「大きな不満」を吐露して本性を現してしまったわけだが，この登場人物の「一貫性のなさ」は著者の責に帰するのか，という語り手の読者への問いかけで始まる。その著者メルヴィルがあたかも語り手を通して読者に肉声で語りかけているような，小説の登場人物論となっている。

語り手は，「登場人物の描写には一貫性が保たれるべきだということほど，小説の作者が気をつけなければならないことはない」という主張があるが，それは「一見合理的に思えるが，よく見るとそれほどではない」。なぜならば，その主張がもう一つの創作上の必須要件である「あらゆる小説にはある程度の創意が許容される一方，事実に基づく小説は決して事実と矛盾してはならない」ことと結びつかず，実生活で一貫性のある人物はめったにいない事実も，その合理性に疑問を抱かせるからだとしている。

（24） See *The Confidence-Man: His Masquerade* (New York: W. W. Norton & Company, 2006), p. 98, note 8: “It is an ascertained fact, that Jesuits are prowling about all parts of the United States in every possible disguise, expressly to ascertain the most advantageous situations and modes to disseminate popery. A minister of the gospel from Ohio, &as informed us, that he discovered one carrying on his devices in his congregation; and he says, that the western country swarms with them under the names of puppet show-men, dancing masters, music teachers, pedlars of images and ornaments, barrel organ players, and similar practitioners .... Beware of Jesuits!” (*American Protestant Vindicatory,* December 24, 1834). (“Western country”: roughly, the area between the original states and the Mississippi River.) Melville is satirizing the current paranoia of the ultra-American Know-Nothings. One of the Harper brothers, Melville’s second American publishers, was elected mayor of New York after an anti-Catholic campaign. Below, “triangular duel” was famous as the title of a farcical episode in Captain Frederick Marryat’s *Mr. Midshipman Easy* (1836).

（25） ピッチが童児愛好者であり，好みがうるさい人物だと指摘する評者もいる。

（26） 本文からの引用に出てくるこの「ディオゲネス」は，ピッチと口論中に世界主義者自身が口に出した人名で，名だたる奇癖の持ち主として知られている古代ギリシャの地シノペの哲学者（前 412–前 323）だが，「いっさいの物質的虚飾を排し，最小限の生活必需品だけで生きる自然状態こそ，人間にとって最高の幸福だとした。衣服をつけず，靴もはかず，野犬のように街頭に寝泊りし，樽を棲家とし」，「〈恥をなくすこと（中略）〉によって，あらゆる因襲，権威から解放されること，これが魂の〈自足（中略）〉を目ざす彼の哲学的実践であった」（平凡社世界百科事典「ディオゲネス［シノペの］」の項より）。

（27） パラリス（d. c. 554 B. C.）《Sicily の Agrigentum の僭主（tyrant）；Perillus なる者の作った真鍮製の牡牛（Sicilian Bull）に人を入れて焼き殺したという；残虐のゆえに 16 年の在位ののち火あぶりにされた》『研究社リーダーズ＋プラスＶ2』

（28） 「デンマーク王子ハムレットは父王の急逝後あまりにも早く母が父の弟で王位を継いだクローディアスと再婚したことに悩むが，やがて父の亡霊によって父が叔父に毒害されたことを告げられる。彼は父王暗殺の状況を筋に仕組んだ芝居をクローディアスに見せてその反応を試す一方，狂気を装っ

て復讐の機をうかがうが，そのうちに王と誤って重臣ポローニアスを刺殺してしまい，その娘で彼の恋人であったオフィーリアは狂死する。遊学先から帰国したポローニアスの息子レアティーズは，王と結託して親善試合の最中にハムレットを毒剣で刺し，ハムレットもまた彼と王を殺して死ぬ。」（平凡社世界百科事典「ハムレット」の項より）

ポローニアスの息子レアティーズへの助言は，*Hamlet,* I, iii, 59–80 にある。